

聖所は清められる



キリストがそうなさったのは、水で洗うことにより、言葉によって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、また、しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるためである。
エペソ 5:26,27

聖所は清められる

聖所は清められる

目次

目次	2
「聖所は清められる」	3
I. 聖所と再臨運動.....	3
第三天使の使命と完全の標準.....	5
II. 罪の教理.....	11
罪とは何であろうか?.....	14
III. 神の罪の処理法.....	22
IV. 聖所の清めと健康改革.....	48
V. キリストの模範.....	52
1. キリストはアダムが罪を犯して後の墮落した性質を取られた。	52
2. キリストのご品性.....	54
3. キリストは我々の模範 1 ペテロ 2:21.....	57
4. キリストは我々に期待している、我々を必要とされている！	58
5. キリストのために.....	61
付録: キリスト教会の二つのグループ 初代文集 124-126	63
チャート 罪人から栄化へ	64

「聖所は清められる」

I. 聖所と再臨運動

「聖書の中で、他のどの聖句よりも、再臨信仰の基礎であり、中心的な柱であったものは、『2300の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する』という宣言であった（ダニエル書 8:14）。」大争闘下 119

再臨運動は19世紀の半ばに起こった。「キリストが再臨なさる。罪を悔い改めて神に立ち返り、主を迎える備えをせよ。」との宣教は大再臨運動となって発展していった。それは、再臨は何時という追求から始まり、大失望後、聖所とは何かという追及と聖所の清めとは何かという追求に移っていった。ダニエル 8:14「聖所は清められる」とのこの聖句から第一天使の使命が生まれ、次に第二天使の使命が生まれ、夜半の叫びがなされ、そして第三天使の使命が生まれたのだった。真理の理解は漸進的に進んでいった。「正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して真昼となる。」（箴言 4:18）

大失望の後、彼らは聖書研究によってイエスを天の至聖所に見出し、喜びと希望と確信に満たされて、全世界に向かって飛び立った(初代文集 415,416)。しかし今日、あれほど熱烈だったキリスト再臨の待望感と、伝道心は失せていった。アドベンチストの動揺、焦燥、アイデンティティー喪失の危機などよく言われるようになった。

その原因はどこにあるのだろうか？今日の教会はもう一度次の質問を自らに投げかける必要がある：

もし、ダニエル 8:14 の「聖所が清められる」という意味が漸進的に理解されて第一天使、第二天使、夜半の叫び、第三天使の使命をもたらしたのであるならば、約束された黙示録18章の最後の大運動も、この聖句の更なる深い理解にかかっているのではなかろうか。

これは単なる推測ではない。主の僕がそう言っている：

「すべての者は、天の聖所において進行中のあがないの働きに関してもっと聡明になる必要がある。この偉大な真理が悟られ、理解されるならば、それをしっかり把握する者は神の大いなる日に立ち得るように人々を備えさせるためにキリストと協力して働くであろう。そして彼らの働きは成功するであろう。」5T575

今日まだあの古い再臨信仰の土台についての理解が十分でないというのだろうか？まだそのことに関して理解の発展があるのだろうか？「この地上歴史において、終末に関しての特別な真理の展開が地上に住む最後の世代までである」(2T692-693)とされている。

現代の真理の発展を回顧してみよう。この研究で、神から当時与えられた聖所に関する光、それから更に増し加えて与えられた光を集めていきたい。

● ダニエル 8:14「聖所は清められる」と第一天使の使命：

ウィリアム・ミラーと他の再臨運動者たちが宣べ伝えたのは、「聖所を清めるためにキリストはおいでになる、キリストの再臨は何時？」ということにのみ集中していた。彼らは「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。」との叫びをあげた（初代文集 382-385）。「清められ

る」ということよりも「2300 日」という日時の設定に集中した。1844 年の春にキリストの再臨があることはダニエル 9:24-27 の 70 週の預言の研究が確信を与えた。その中で明白な預言の成就が起っていた。

聖所はこの地上を指すものであるというその当時の一般的な考えを、彼らは脱し切れなかった。地上をさばき、清めるためにキリストが再臨なさる、悔い改めて神に立ち返ろうとの厳粛な訴えは多くの人を覚醒させた。事件は間違っていたものの、神が一步一步導いておられる運動であった。

従って、彼らはダニエル 8:14 の「聖所の清め」と黙示録 14:6,7 の第一天使の「さばき」は同事件であると捉えて宣べ伝えたのであった。

神のさばき = 聖所の清め = 再臨の時

1844 年の春、期待していたキリストの再臨は起こらなかった。失望を経験する。

● 聖所の清め = 神のさばきと第二天使の使命

各時代に神が送られる漸進的な光、「現代の真理」を拒否するとどうなるか？

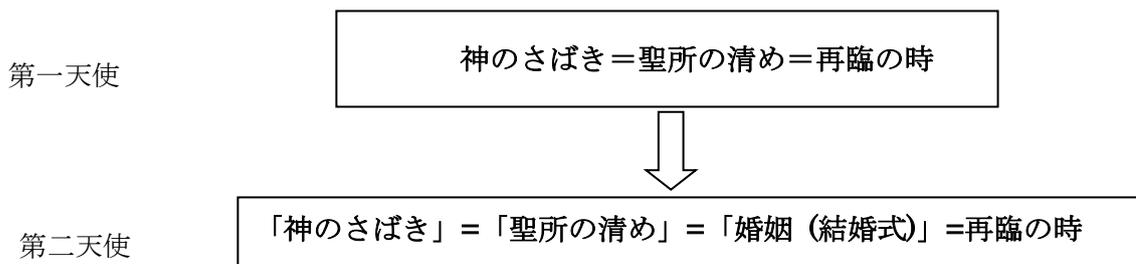
「諸教会が、第一天使の使命を受けることを拒んだときに、彼らは、天からの光を拒否し、神の恵みを失った。彼らは、自分たち自身の力に頼った。そして、彼らは、第一天使の使命に反対することによって、第二天使の使命の光を見ることができない状態に陥ってしまった。しかし、神に愛された者たちは、圧迫に会い、『バビロンは倒れた』というメッセージを受け入れて、諸教会を去った。」初代文集 390-391

失望した神の民にまた光が送られた。「第二天使の使命の終わり近くに、天からの大きな光が、神の民を照らすのをわたしは見た(付録参照)。この光は、太陽よりも明るく見えた。そして、わたしは、天使が「さあ花婿だ、迎えに出なさい」と叫ぶ声を聞いた。」初代文集 391

聖所の清め、あがないの日は 1844 年 10 月 22 日であることが分かった。アルタシャスタのエルサレムの再建命令が出たのは秋であったこと、ユダヤのあがないの日、聖所の清めの日はユダヤ暦で 7 月 10 日、即ち現代の 10 月 22 日であることが分かった。このメッセージはすべての伝道地に伝わっていった。それが「夜半の叫び」と呼ばれた。(大争闘下 105)

第二天使に力を添えた「夜半の叫び」はマタイ 25 章の花婿を迎える 10 人の乙女のたとえ話に描かれている。花婿なるキリストは花嫁なる教会を迎えに再臨なさるとのたとえが再臨運動に適用された。「夜中に、『さあ、花婿だ、迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。」花婿の到着は「婚姻 = 結婚式」と呼ばれ、「神のさばき」、「聖所の清め」と同じ出来事である。

しかし、なぜ、イエスは期待したその日に来られなかったのか、その理由を後で検討する。



第二天使の使命で、キリストの再臨に起こることとして「**神のさばき**」=「**聖所の清め**」=「**婚姻(結婚式)**」という三つの事件が結び付けられた。

1844年10月22日に花婿なるキリストの再臨はなかった。再臨信徒は大失望する。再臨信徒に対するあまりにも苛酷な試練であった。しかし、それは神が、教会を全く利己的な動機と世俗的な考えから清めるためであった。純潔無垢の花婿と結婚するためには、花嫁も「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会」(エペソ 5:27)でなければならない。神は漸進的にまたもう一つの光を教会に送られる。

第三天使の使命と完全の標準

神は失望した花嫁なる教会に第三天使の使命を送られる。第三天使は「ここに神の戒めを守り、イエスの信仰を守る聖徒の忍耐がある(欽定訳)」と言って天の至聖所を指さした。

初代文集 414-415「わたしは、第三の天使が、上の方を指さして、失望した人々に、天の聖所の至聖所への道を示しているのを見た。信仰によって彼らが**至聖所**にはいるときに、彼らはイエスを見出して、新たな**希望と喜び**を味わうのである。わたしは、彼らが、過去を振りかえって、イエスの再臨の宣言から1844年における時の経過に至るまでの、彼らの経験を回顧しているのを見た。彼らは、彼らの失望が解き明かされて、ふたたび**喜びと確信**に活気づけられた。第三の天使は、過去と現在と未来を照らした。そして、彼らは、神が不思議な摂理によって、彼らを導いてこられたことを知るのであった。」

初代文集 414「イエスは、聖所における奉仕を終わり、**至聖所**には行って、神の律法を納めた箱の前に立たれたときに、世界に対する**第三の使命をたずさえたもうひとりの力強い天使**を、お送りになった。」

再臨信徒はなぜ、再び希望と喜びと確信に活気付いたのであろうか。そこに愛する花婿イエスを見出したからであった。

この使命は、獣の刻印の代わりに神の印を受けるように人々に訴える**警告の使命**であると同時に、神の戒めを守りイエスの信仰を守る聖徒たちに天の聖所におけるイエスの最後の仲保に目を向けさせる**希望のメッセージ**であった。(初代文集 414、415；大争闘下 374,375)

この研究では、黙示録の14:9-12の第三天使の使命と聖所の奉仕の関係を取り扱いたい。

第三天使の使命は、「ここに神の戒めを守り、イエスの信仰を守る聖徒の忍耐がある(欽定訳)」で終わっている。こうして**完全にされた民**が、大いなる悩みの時=地上に七つの災害の降り注がれる時、仲保者なくして立ち得るようになるために備えるメッセージである(黙示録 14:19,20；15,16)。

イエスが待っておられるのは、「また、しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるためである。」(エペソ 5:27)。

黙示録にはこのグループのことを144,000と描写している。彼らは神の名、品性が額に印され、純潔で、口に偽りのない、神のみ座の前で過ちのない者たちである。黙示録7章と比較せよ。

「われわれは全力を尽くして、われわれの**目標**、すなわち彼(キリスト)の**品性**まで到達しようと努めているであろうか。主の民はこの**目標**に到達したときに**額に印**を受けるのである。**聖霊に満たされて**、彼らは**キリストにあって完全**な者となり、記録の天使は『すべてが終わ

った』と宣言する。」OHC15

雅歌書は花婿キリストと花嫁なる教会のロマンスを預言的に描いた書である。何回か花嫁なる再臨信徒の失望の後、愛の完成された時、最後に次のように応答するのである。

雅歌 8:4-7「エルサレムの娘たちよ、わたしはあなたがたに誓い、お願いする、愛のおのずから起るときまでは、ことさらに呼び起すことも、さますこともしないように。自分の愛する者によりかかって、荒野から上って来る者はだれですか。りんごの木の下で、わたしはあなたを呼びさました。あなたの母上は、かしこで、あなたのために産みの苦しみをなし、あなたの産んだ者が、かしこで産みの苦しみをした。

わたしをあなたの心に置いて印のようにし、あなたの腕に置いて印のようにしてください。愛は死のように強く、ねたみは墓のように残酷だからです。そのきらめきは火のきらめき、最もはげしい炎です。

愛は大水も消すことができない、洪水もおぼれさせることができない。もし人がその家の財産をことごとく与えて、愛に換えようとするならば、いたくいやしめられるでしょう。」

花婿キリストと花嫁なる教会の結合が完成した時、それは最後のあがない(final at-one-ment)の経験である。その時彼らの愛は死のように強く、火も水もどんな迫害も問題ではなくなる。結婚式が済むと花嫁は心から「わが愛する者よ、急いでください。かんばしい山々の上で、かもしかのように、また若い雄じかようになってください。」(8:14)と言えるのである。

● 我々の目標＝完全＝キリストの品性＝額に印される＝聖霊の充滿(後の雨)

大争闘下 140-141「天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない。

初代文集 149 「わたしは、また、悩みの時に、聖所に大祭司がおられないで神のみ前に生きるためにはどのような状態でなければならないかを悟っていない人が多くあるのを見た。生ける神の印を受け、悩みの時に保護される人々は、イエスのかたちを完全に反映していないなければならない。

5T214 「品性に一点のしわか、しみがあるなら誰も神の印を受ける事はできない。」

実物 47「キリストの品性が完全にキリストの民の中に再現されたときに、彼らをご自分のところに迎えるために、主はこられるのである。」

完全な品性はキリストの再臨に備えるばかりではなく、大いなる悩みに備えることであるから、大いなる悩みの前に、キリストが至聖所から出る前に達成されなければならない。

大争闘下 396「今、われわれの大祭司がわれわれのために贖いをしておられる間に、われわれは、キリストにあって完全になることを求めなければならない。救い主は、その思いにおいてさえ、誘惑の力に屈服されなかった。サタンは、人々の心の中に、なんらかの足場を見つける。心の中に罪の欲望があると、サタンはそれを用いて誘惑の力を表わす。しかし、キリストはご自身について、「この世の君が来る……。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない」と宣言された(ヨハネ 14:30)。サタンは、神の子の中に、彼に勝利を得させるなんのすきも見つけることができなかった。神のみ子は、天父の戒めを守られた。そして、

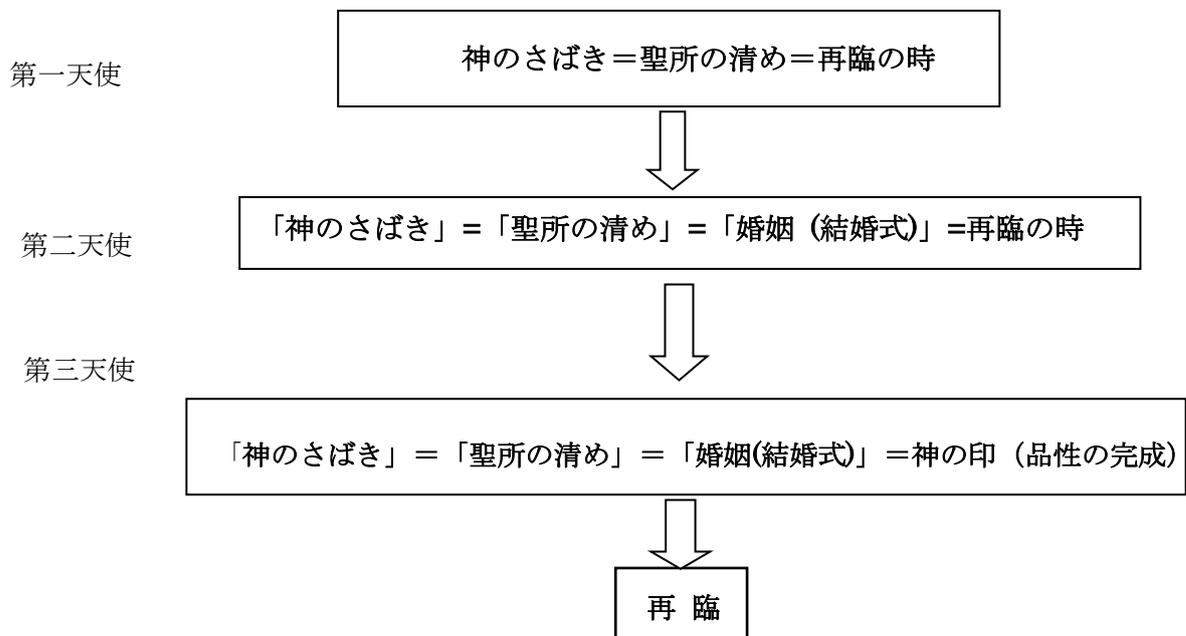
サタンが自分に有利に活用することのできる**罪が、彼の中にはなかった。これが、悩みの時を耐えぬく人々のうちになければならない状態なのである。**」

ある人は、「人間は罪は犯さなくなるが、罪の性質はもったままであるので再臨のときまで罪なき完全はあり得ない」と説く。靈感の言葉は単純明快であるが、人間の神学が難しく混乱させるのである。キリストの再臨の時に我々の品性、性質の変化はないと明言している。

OHC278「**品性**の改変は主が来られる前に起こらねばならない。我々の**性質**は純潔で清くなければならない」

OHC 278「**キリストがおいでになる時**、我々の卑しい体は変えられ、彼の輝かしい体のようにされる。しかし、その卑しい**品性**は、その時、清くされることはない。**品性**の改変は、彼がおいでになる前に起こるのである。我々の**性質**は純潔で清くなければならない。我々の魂にご自分のみ像が反映されるのを喜びをもってごらんになるために我々はキリストの心を持たなければならない。」

こう見ると、完全はただ単に外面的に律法を守るというのではなく、純粋な心でそれを守り、イエスの品性を完全に反映することである。これこそ我々が到達しなければならない**標準**である。



標準に達する

しかし、**いかに標準に達するか**という方法を知らされずに律法の標準だけを強調するなら、我々は全く絶望的である。

「文字は人を殺し」霊のない律法は「死の務」をするにすぎない(2 コリント 3:6,7)。教会員の霊的な死の原因はここにある。もはや完全を目指さない理由である。160年経ってもイエスが完全な民をもち得ない理由はここにある。

神が期待している民になるために第三天使の使命に注目してみよう。

初代文集 414「第三の天使は、『ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』と言って、メッセージを終わっている。彼は、この言葉を繰り返したとき

に、天の聖所を指さした。このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる。イエスはそこで箱の前に立って、恵みがなお与えられているすべての人々と、知らずして神の戒めを破った人々のために最後の仲保をしておられるのである。」

第三天使はどこを指しているのか？何回強調されているか。

「天の聖所を指した。」

「このメッセージを信じるすべての者の心を至聖所に向けられる。」

「上のほうを指して」

「天の至聖所への道を示している。」初代文集 414,415

詩篇 77:13「神よ、あなたの道(方法)は聖所にある(欽定訳)。

- ▲ 1844 年以来、イエスは至聖所におられるのである。
- ▲ しかし、イエスご自身は、花嫁であるラオデキヤ教会の外に立たされている姿が描かれている。黙示録 3:20
- ▲ 我々はどこにイエスを見いだすことができるのだろうか？
- ▲ イエスを見失って、標準さえも見失い、アドベンチスト(再臨信徒)として、イエスを見失ったマリヤのように、1844 年に大失望した再臨信徒のように、希望と喜びと確信を失ってはいないだろうか？(初代文集 415 参照)。アドベンチストの焦燥の原因はどこにあるのだろうか？
- ▲ ヨセフとマリヤが過ぎ越しの祭から帰途についたとき、イエスが共におられないことに気がついた。「焦燥感」にかられた。彼らはどこにイエスを見いだしたか？そして喜びを取り戻したか？
- ▲ 今日どこにイエスを見いだして、喜びと確信と希望を取り戻せるのだろうか？初代文集 415,416 参照。
- ▲ 「神の戒めを守る」べき民は、どこにその道を、方法を見出すか？我々自身の力では絶対に神の律法を守れないこと、完全になれないことに早く気がつかなければならない。
- ▲ 至聖所にいますイエスを見失ったために、標準さえ見失ってしまった。その結果律法とイエスを切り離れた諸教会の福音の説き方をしているのではないだろうか？
「ここに神の戒めを守り、イエスの信仰を守る聖徒の忍耐がある」といって至聖所に目を向けるように指し示しているのが第三天使である！

● 「神の戒めとイエスの信仰」という表現は、どんな意味があるだろうか？

聖所と魂の宮

イエスはご自分の民の内にお住みになることを望んでおられるのである。

出エジプト 25:8「彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである。」

レビ記 26:11,12「わたしは幕屋をあなたがたのうちに建て、心にあなたがたを忌みきらわないであろう。わたしはあなたがたのうちに歩み、あなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となるであろう。」

2 コリント 6:16「神の宮と偶像となんの一致があるか。わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、『わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。そして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう』。」

1 コリント 3:16,17 「あなたがたは**神の宮**であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである。」

これらの聖句から、神のオリジナルのご計画は、手で造った宮でなく、**ご自分の民の中に神がお住みになる**ためだったということが分かる。イスラエルが神の栄光を現すことに失敗したので、聖所を造るようになったのである。

使徒 7:48,49 「しかし、いと高き者は、手で造った家の内にはお住みにならない。預言者が言っているとおおりである、『主が仰せられる、どんな家をわたしのために建てるのか。わたしのいこいの場所は、どれか。天はわたしの王座、地はわたしの足台である。』」

(ステパノは神殿建設の時のソロモンの祈りから引用したのである。)

教育 29 「こうした幕屋の象徴の目的は、キリストを通して成就されなければならなかった。こうしたすべての象徴を通して、神は、**人の魂についてどんな目的をもっておられるかという**ことを彼らがさとるように望まれた。ずっと後に、使徒パウロによって示されたのも、これと同じ目的であった。すなわちパウロは、聖霊に感じて、こう語っている。『あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである』と。」

神が意図した聖所の目的を理解するのに失敗

- イスラエルは国家として神の目的を果たすのに失敗した。その結果、
- ペリシテ人に荒野の幕屋が破壊されるのをゆるされた。
- エルサレム神殿は、バビロンによって破壊された。
ソロモンの警告： 1列王 8:27； 使徒 7:48,49
エレミヤの警告： エレミヤ 7:4
- ゼルバベルの神殿再建の目的は何であったか？ ダニエル 9:24
- エルサレム神殿 紀元 70 年に破壊される。

神はかつてご自分の民をエジプトあるいはバビロンから呼び出されたように、1844年に我が民を呼び出された。他のどの民よりも聖所の奉仕についての知識を与えられた。しかし、我々は天の聖所におけるキリストの奉仕の目的を把握しているだろうか？

聖所の研究にあたって最も基本的な原則がある。天の聖所の奉仕は**我々のため**である。

天の聖所でイエスが奉仕しておられる間、**地上の魂の宮では聖霊が我々の内**に働かれるのである：

ロマ 8:15,16,26,27 「聖霊によって父に祈る。わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることをあかしして下さる御霊もまた同じように、弱いわたしを助けて下さる。なぜなら、わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである。」

ヨハネ 14:16,17 「父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。真理のみ霊はあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。」(1コリント 3:16,17)

ヨハネ 16:7-16 「御霊は罪と義と裁きについて目を開く。」

3 希望 56,157 「みたまは人を生れかわらせる働きをするものとして与えられるのであって、これ
がなければ、キリストの犠牲は何の役にもたたなかったであろう。世のあがない主によって達
成されたことに効果を与えるのはみたまである。心が清くされるのはみたまによってである。」

神の宮が汚される

創造主の内住の宮

「神の住居として建てられたこの宮は、イスラエルと世界のために実物教訓となるように計
画されていた。輝く聖なるセラフから人間にいたるまで、すべての被造物が創造主の内住さ
れる宮となるのが、永遠の昔から神の目的であった。」希望上 186

何が魂の宮を汚したか？

希望上 186 「罪のために人類は神の宮とならなくなった。人の心は、悪のために暗くなり、けがれ
たものとなったので、もはや聖なる神の栄光をあらわさなくなった。」同上

ロマ 3:23 罪のため神の栄光を受けられなくなった。

イザヤ 53:6 みな羊のように迷って、自分の道に向かっていった。

愛の神、創造主はどんな計画を持っておられるか？ 福音の本質は回復

希望下 373 福音の本質は回復

祝福 79 元の純潔さと美しさに回復するのが福音の目的

マタイ 1:21 イエス、もろもろの罪から救う者

黙示録 1:5,6 罪から解放し、王とし、祭司とする

大争闘下 216 「以前の主権」、完全で十分な義認、栄光の回復

福音は罪からの救いを得させる力である（ロマ 1:16；マタイ 1:21）。そして「信仰の従順」に至らし
めるものである。（ロマ 1:2-5；16:25,26）故に、罪とは何か、罪人の性質はどんなものかを理解しな
いと、福音が理解できないし。イエスの受肉、この地上に來られた目的も理解できないし、第三天使の
使命を理解することはできない（黙 14:12）。聖所の清めの意味がわからない。なぜイエスが至聖所に移
られ、「特別な、最後のあがない」の働きをする必要があるかを悟ることができない。我々のメッセージ
と任務の意味を見失い、SDAの存在の理由が分からなくなる。そうすると、「バビロンから出よ」と
も叫べなくなる。獣に対する警告もできなくなる。キリスト教の単なる一教派としての存在を辛うじて
保つために「一人の改宗者をつくるために、海と陸とを巡り歩く」宗教ゲームに参加することに満足感
を覚えるようになる。

「教団は、信仰による義の理解にきわめて重要な分野—キリストの性質、完全、原罪につい
ての意味を明らかにすることができなかった。その結果、教会の内部にさまざまな神学の思
潮が存在するようになり、わが教会員を混乱状態に陥れた」フランシス・キャンベル（元ア
フリカ、ユニオン・カンファレンス総理）

「我々は教会としてこの3つの、非常に重要な分野—罪、キリスト、完全—において我々の
信条を正式に定義づけることができなかった。これらの点についての我々の不明瞭で、さま
ざまな異なった見解の故に、我々は過去40年間、あいまいさとフラストレーション（欲求
不満）の神学的荒野をさまよってきた。しかも、これらの点で互いに矛盾する見解を持って
いたので、我々のメッセージと我々の任務を明確に定義づけることができなかった」デニ

ス・ブリービー

「キリスト教会の中にある誤った教理や奇怪な考え方は数えきれないことである。神のみ言葉によって建てられた道標の一つを動かすことによって生じる有害な結果は、計り知れないものがある。…ついには、事実上無神論者になってしまうのである。俗受けのする神学の誤りが、多くの者を懐疑論者にしてしまった」大争闘 270

II. 罪の教理

キリストへの道 22 頁に「人は罪の恐ろしさを知るまでは罪を捨てるものではない」とある。罪なき完全な品性に到達するということは、完全に、徹底的に罪の恐ろしさを知る経験である。「わたしは罪人の頭である」(1 テモテ 1:15)、「自分たちの罪深さを完全に認める」(国指下 193)という域に達する経験である。キリストを十字架につけたのは私であるとの認識が後の雨をもたらすのである(キ道 30、ゼカリヤ 12:10)。神の民が完成のしるしとして生ける神の印を受ける前に聖霊の働きがクライマックスに達する。「彼らが罪のはなはだしい邪悪さをはっきり認めるのは、彼らがキリストに近づき、彼らの目がその完全な純潔さを凝視するからである。」国指下 195-196

人間の徹底的堕落

詩篇 51:5 「見よ、わたしは不義のなかに生まれました。わたしの母は罪のうちにわたしをみごもりました」

エペソ 2:1-3 「さてあなたがたは、先には自分の罪過と罪とによって死んでいた者であって、かつてはそれらの中でこの世のならわしに従い、空中の権を持つ君、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って、歩いているのである。また、わたしたちもみな、かつては彼らの中にいて、肉の欲に従って日を過ごし、肉とその思いとの欲するままを行ない、外の人々と同じく、生まれながらの怒りの子であった」

創 6:5 「すべてその心に思いはかることが、いつも悪いことばかりである…」

ヨハネ 3:3-6 「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」

「肉から生まれるものは肉である」

ロマ 8:7 「肉の思いは神に敵するからである。すなわち、それは神の律法に従わず、否、従い得ないのである」

エシ 17:9 「心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。だれがこれを、よく知ることができようか」

詩篇 58:3 「悪しき者は胎を出たときから、そむき去り、生まれ出た時から、あやまちを犯し、偽りを語る」

ロマ 3:9-23 を見よ。

ヤコブ 1:14,15 「人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲にひかれ、さそわれるからである。欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す」

宗教改革者たち

「原罪」という言葉を使いはじめたのはアウグスティヌスで、アダムの罪の結果、罪深い性質が遺伝子、染色体を通して、生物学的に人間に受け継がれるという。アドベンチストはどのようにアダムの罪深い性質が受け継がれるかというアウグスティヌスの方法には賛同しない。しかし、腐敗した心、肉の心を受け継ぐことは確かである。我々は「原罪」という言葉を、「三位一体」のように、必ずしも使う必要はないが、大宗教改革者達の教えたことを理解することは重要なことである。

ルター

「…原罪とは悪への傾向である」ローマ書講義 167

「原罪は悪いことをする生来の傾向で、良いことへの気が向かないこと、またそれをする無能力である」Luther's Small Catechism,p40

「ロマ 5:12…これが原罪と呼ばれるものである。この罪の実は後に十戒で禁じられている悪い行いである。例えば、不信、偽りの信仰、偶像礼拝、神を恐れないこと、高慢、盲目、神への無関心、神のみ言葉への無関心、親への不服従、殺人、不貞、盗み、だまし等々…この遺伝的な罪の腐敗はあまりにも深く、いかなる理性も理解できないゆえに、聖書の啓示によって信じるべきものである」Smalcald Articles,Part Three,Sec.1 Book of Concord,Vol.1 p321

「…だからこの罪、あの罪を犯したので我々は罪人というのではなく、まず罪人だから罪を犯すのである。」Luther's Work Vol.2,p347-351

オーグスブルグ（プロテスタント）告白、1930年。メランクトンによってほとんど書かれた。

「我々の教会は満場一致をもって、アダムの墮落以来、生まれてくるすべての人は罪を持って生まれてくると教える。つまり、神を恐れず、神に頼らず、情欲を持って生まれ、これは病気であり、根本的な悪徳は真に罪である。それは今日もバプテスマと聖霊によって生まれ変わらない者たちを有罪とし、永遠の死をもたらすものである。」Quoted in Luther's Small Catechism p90

カルビン

「故に原罪は我々の魂のすべてに浸透している遺伝的な墮落、我々の性質の腐敗と思える。」John Calvin, Institutes of Christian Religion, The Classics, Vol.xx,p251

ウェスレー 原罪について次のように言っている:

「我々はなぜ我々の性質としての罪を特に観察すべきかといういくつかの理由を述べてみたい:

- (1) なぜなら、すべての罪の中で、それは最も広範囲にわたって拡散している。それは全身にわたって、すべてをだめにする。外の罪は神のみ像のある部分を傷つけるが、これはすべてを醜くする。それは泉に投げ込んだ古い蛇の毒である。だからすべての行為に、魂のすべての呼吸に影響を与える。
- (2) それは我々の心と生活のすべての特定な罪の原因である。『悪い思い、姦淫は人の心の中から出てくるものである』。そして他の憎むべきことも。それは苦い泉であり、ある特定の欲はそれから流れ出てくるものである。そしてそれは、内部のほんの一部分だけである。
- (3) それは、実際上はすべての罪である。それはすべての種である。機会があったら頭をも

たげてくる。かつて生存した最も落ちぶれたものの会話にさえすべての罪が姿を現わしたことはなかった。しかし、あなたの性質を見よ。その根にすべての罪を見るであろう。そこにすべての不義の満ち満ちたもの―無神論、偶像礼拝、姦淫、殺人―を見るであろう。このうちの一つもあなたの心に現れていないであろう。しかし、あなたが最もよく知っているよりもさらに不可解な悪の深さがあるのである。

(4) すべての罪の中で我々の性質としての罪は、最も定着した、永続的なものである。罪深い行為は、その不義としみは残るが、一時的である。しかし、性質の腐敗は消え去らない。それは強力に、夜も昼も、いつも、改心の恵みによって変えられるまで残る。

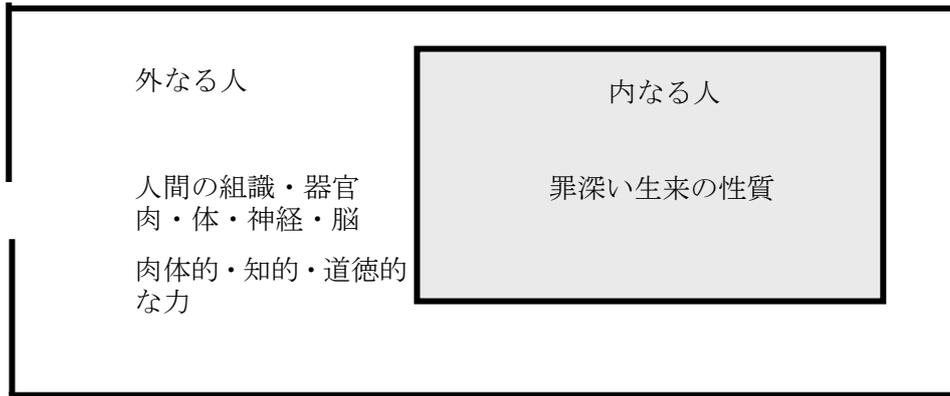
「あなたは腐敗した心の中に3つのことを観察するであろう。①腐敗した性質、悪への傾向があるので、人はすべての善には慣れていないし、すべての悪に適している。②その腐敗した性質の特定な欲、性癖、例えば、高慢、欲情、むさぼりなどがある。③他のものよりあるものはたやすく我々を悩ます、強いものがある。

「あなたの性質の罪を十分に見えるようになるために3つのことをお勧めしたい。①神の律法の霊性と広さを知るように学べ。それは自分自身を見る鏡であるから。②いつもあなたの心を観察せよ。特に誘惑に会った場合。誘惑は新しくされない心のかすを現わす火である。③神の御霊に照らしてもらうためにイエスを通して神に行きなさい。…み言葉を通して聖霊は教えるのである。…

「結論:これまで考慮してきたことから、あなた方すべての者にキリストをお勧めしたい。生まれつきのままの者たちよ、あなたの生まれつきの腐敗に残っているものを清めてもらうために、へりくだれ、キリストに來たれ、キリストにすがれ。生まれつきのままの姿にあるものたちよ、どうなさる? あなたは死ななければならない。…しかし直ちにイエス・キリストに來なさい。…」The Works of John Wesley, Vol.9, Zondervan, pp462-464

まとめ:

- 1) すべての人はその中に**罪を持って生まれてくる**ということである。
- 2) 罪は表現された行為にだけでなく性質にある。赤ん坊は思想がまだ発達していないが、しかし悪への傾向、不服従への性向がすでにあって表されるのを待っている。すべての罪の行為は受け継いだ**罪深い性質(罪性)**にあるのである。ちょうど櫛の木がその実に含まれているように。子供は罪を犯して罪人となるのではない。性質が罪深いから罪を犯すのである。「悪い木が良い実をならせることはできない」マタイ 7:18。肉から生まれる者が罪の行為をしていなくてもなお罪人である。彼はキリストの功しを必要とするのである。
*「**罪深い性質(Sinful nature)**」はここでは、弱められた肉体的、知的、道徳的な能力を含む、人間の墮落した組織、器官を意味しているのではない。人間の利己主義と腐敗の存在する心、精神、内なる人を意味している。
- 3) だから、罪には2面ある。すなわち、**罪の性質(罪性)**と**行為の罪**。パウロは「古き人をその行いと一緒に脱ぎ捨て」と言っている。
- 4) 生来の罪深さは、心、精神、霊であり、墮落した肉体ではない。(イエスもそれを持っておられた) 罪は原則である。サタンの精神である。それは不義の精神、高慢の精神、敵意の精神、利己主義の精神であり、自我であり、自己中心の精神であり、自己依存の精神である。それは組織、器官に存在するものではない。血液の流れにあるのではない。



「だから、わたしたちは落胆しない。たといわたしたちの**外なる人**は滅びても、**内なる人**は日ごとに新しくされていく。」コリント第二の手紙 4:16

「わたしたちは、このような約束を与えられているのだから、**肉と霊**とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くなるうではないか。」コリント第二の手紙 7:1

罪とは何であろうか？

1. 罪は違反の精神である。

「罪についての唯一の定義は、神のみ言葉のうちに与えられている定義である。それは『罪は不法である（律法を犯すことである。欽定訳）』ということである。すなわち**罪**は、神の統治の基礎である**愛**という大法則と戦っている原則が、外にあらわれた結果である。」大争闘下 228 ロマ 3:23 「**すべての人は罪を犯したため**、神の栄光を受けられなくなっており、」

2. 律法の違反の行為だけではなく、内部の原則の問題である。

「すべての服従の本質と特色は**内部の原則**、すなわち神の律法の愛、義の**愛**が外に現われ出ることである。」TMK118

3. 罪は利己心、自己中心の精神である。

「**利己主義の精神**は**サタンの精神**である。」患下 20(英文)

「**罪は利己心**から起こった。覆うことをなす天使ルシファーは天の第一位を望んだ。」希望上 4

「初め、人はすぐれた能力と調和の取れた精神を与えられていました。かれはまた人として完全で神と調和し、思想も純潔で、きよい目的をもっていました。けれども、神に背いたためその能力は悪に向けられ、**愛は利己心とかわってしまいました**。罪のため**人の性質**はすっかり弱められて、自分の力では悪の勢力と戦うことができなくなりました。こうして**悪魔のとりこ**となってしまったのでありますから、もし、神が特別に救ってくださらなかったならば、いつまでもそのままの状態でしたことであらうでしょう。」キリストへの道 13

「カルバリーの十字架に、**愛と利己心**が向かい合って立った。ここにこの両者の最高のあらわれがあった。」希望上 46

「天で反逆を起こしたのと同じ精神が、今なお地上で反逆を起こさせている。…**彼(サタン)の精神**は、今、**不従順の子らを支配している**。」大争闘下 237

4. 罪は神に依存しない精神である。神からの独立精神。

「天で彼は自分自身のために生きようと決意した。」

「創造主に仕えるかわりに自分のために仕えようとするルシファーの精神」人あ上5

「サタンは神に依存して生きているのであった。彼はその依存を無視しようとした。」
RH4/16/1901

5. 罪は自らの内に「清さ」「正しさ」があるとする精神である。

「彼は、天使たちは支配される必要はなく、自分自身の意志に従うべきで、この意志こそ、いつでも彼らを正しく導くものであるという主張を繰り返した。」大争闘下237

サタンは天使たちに「自分自身の知恵が十分な道標となるから、こうした制限は不必要であると言った。彼らは、神のみ名を汚し得るものではない。その思想もすべて清いのである、神ご自身があやまりを犯すことがあり得ないと同様に、彼らもあやまちを犯すことはありえないと言うのであった。」人あ上7

「この偉大な天使の栄光のすべては、神から与えられたものであるにもかかわらず、彼はそれを自分のものであるかのように思うようになった。」人あ上4

ルシファーの提案は「悪いことをしよう」ということではなく、「神ぬきで一良いことをしよう」であった。しかし、どんな被造物もその中に、自ら作りだす清さ、正しさはないのである。

6. 罪は自己称揚、高慢の精神である。

「ルシファーは、少しずつ自己を高めようという野望にふけるようになった。」人あ上4

「彼は自分の栄光を誇る気持ちに満たされた…神と等しくなろうと欲した。」同上6, 7

7. 罪はしっと、ねたみ、憎しみ、不満の精神である。生残24、初文254、大争闘下232

8. 罪は神をも殺す精神である。

ヨハネ 8:44—サタンは初めから人殺しであったとイエスは言われた。

「ルシファー自身も、最初は、自分がどちらへおし流されているのかが分からず、自分の感情のほんとうの姿が分かっていた。…サタンの原則を十分に発揮させてみる必要があった。…閉じこめられていたしっと、うらみ、憎悪、復讐の炎は、神のみ子に対してカルバリーで爆発し、一方全天は恐怖のうちに沈黙してこの光景を見つめた。」大争闘下232、237

「カルバリーの十字架に、愛と利己心が向かい合って立った。ここにこの両者の最高のあらわれがあった。キリストは慰め、祝福するためだけに生活された。ところがサタンはキリストを死なせることによって神に対する憎悪という悪意をあらわした。サタンは彼の反逆の真の目的が神をみ座から退けることと、神の愛を現わされたキリストを滅ぼすこととにあることを明らかにした。」希望上46

「サタンは自分の仮面が引きはがされたことを知った。彼の統治は墮落していない天使たちと天の宇宙の前に公開された。彼は殺人者の正体を現わした。」希望下286

【ディスカッション】

1. ある人は、罪は**行為**であって我々の**状態**ではないと言う。どう思うか？

「人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである。欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す。」ヤコブ 1:14,15 にあるように、誘惑されてそれにゆだねたとき罪を犯すのである。罪とは律法を犯すことである。「罪は不法(違反、欽定訳)である。」(1 ヨハネ 3:4)。罪深い状態は罪ではなく、自分で選んで犯した時に罪となるのか？

「あなたを誘惑するのは、サタンの行為ですが、それに負けてしまうのはあなた自身の行為です。」青年 432

2. 我々は罪人だから、罪を犯すのか？罪を犯すから罪人となるのか？
3. アダムから譲り受けた生来の罪深い状態に対しては我々は責任が問われ罰を受けることはない。個人で選んで犯した時に責任が問われるのである。

アダムの個人の罪の罪責、ギルト(Guilt)がその子孫に負わされることがあるか？エゼキエル 18:20 ; 人あす 356 「その罪にあずからないかぎり、親の不義のために罰せられない。」ギルトとは、「とが」「とがめ」のことである(高橋義文)。

なぜ我々は他の罪人をさばいたり、とがめてはならないか？

1. ローマ1:24-32 ; 2:1 を見よ。
2. すべての心を似たように造られた(詩篇33:15) KJV
3. 罪の根(生来の罪深さ)が我々の性質にある限り、かつて住んだすべての人の実際の罪は我々の性質の種の中に存在する。ゆえに、過去、現在、未来にわたって全世界の罪はすべての人の中にある。ウェスレーの説教を見よ。

相続される罪深さと体得される罪深さ

人は罪深さを相続するだろうか？罪を犯した時に罪人となるのだろうか？

宗教改革者たちの「原罪」とカトリックの「原罪」の考えはどう違うのか？

「原罪」という言葉を使うと非常に誤解を招くので、「**生来の罪深さ**」という言葉を使いたい。

宗教改革者たちの「原罪」の観念は間違っていたらどうか？聖書にも、証の書にも「原罪」という言葉は用いられていない。最初の罪(original sin)という言葉以外は。「三位一体」という言葉も証の書に一度も用いられていない。

相続される罪深さ

キリストへの道 81, 82 「罪に陥る前、アダムは神のおきてに服従することによって、正しい品性をつくり上げるができましたが、かれはこれに失敗し、かれの罪のために、私どもは**生れながら罪あるもの**となり、自分の力で義となることはできなくなりました。私どもは罪深く汚れているので、おきてに完全に従うことができません。神のおきての要求に応じる義を持ちあわせてません。けれどもキリストは、私どものために逃れる道を備えてくださいました。」

家教 514 「両親は彼らが想像するよりももっと深刻な責任がある。子供たちが相続するのは罪という

遺産である。罪が彼らを神から引き離したのである。…最初のアダムと関係して、人は有罪 (guilt) と死の宣告以外何も受けていない。」

CT192「彼らは両親から**品性の欠点を受け継いでいる。**」

キ実 304「品性の不完全は罪である」

6 T 282「悪い品性の特徴を受け継ぎ」

F E 277-8「品性のあらゆる面が子供たちによって**相続として受け継がれる**」

5 B C 1128「罪の故にアダムの子孫は**生来の不服従の傾向**をもって生まれてきた」

E V 192「…根源の(Original)罪の傾向…心の中に…」

R H 11/29/1887「クリスチャンの戦いについてエレン・ホワイトは次のように言っている。

「**生来の(Imbred sin)罪**との戦いがある」

4 T 496「人の心の中には生まれつきの利己主義と腐敗があり、それは徹底的な訓練と厳しい抑制によってのみ克服されるものである。それでも長年の忍耐強い努力と、熱心な抵抗が要求される。神は貧窮状態を経験することをゆるし、困難な立場におかれるのは、我々の品性の欠点が現され、荒々しさがなめらかにされるためである。」

家教 580「生まれながらの心は、神のことや、天や、天の事物について、考えることを好まないものである。」

ML261「生まれながらの心は、イエスにある真理に対する憎しみに満ちあられている。」

大争闘下 247「生まれ変わっていない者の心には、罪を愛する思いがあり、罪を抱いてその言い訳をする傾向がある。」

MM43「**人間の心の悪の醜さは理解されていない。**」

原罪について、高橋義文先生の記事を読んで頂きたい。よくまとめられている。牧羊、1989年春季号 昭和59年第4期の教課の助け:

「原罪という言葉は、通常三つほどの意味で用いられているようです。☐は人類の最初の罪、すなわちアダム(とエバ)が禁断の木の実を取って食べ、神の命令そむいた罪を指します。英語ではこれを『**原初の罪、最初の罪**』を意味するオリジナル・シン(original sin)と言いますが、これは元来アダムの罪を指します。

☐に、原罪は、このアダムの罪が後代の人間に転嫁されているということを意味します。アウグスティヌスはこの意味で原罪という語を用いています。彼によれば『**遺伝的な罪**』『**相続された罪**』を意味します。彼は特に、アダムとエバから**生殖作用を媒介として世々相続されてきた罪**を考えています。

☐は**人間の罪性の普遍性と執拗性**とを示す言葉として原罪が用いられています。……

しかし、……罪の責任について、いわゆる**生物学的遺伝の観念**を用いてそれを説明することは**適当ではない**ということです。……拒否しなければなりません。……

しかし、その上でやはり、罪の転嫁ということは聖書にしたがって言わなければなりません。理屈に合った説明はできませんが、アダムの墮落後人間は神への離反の状況の中に生まれるに至ったこと、そしてその中で主体的に罪を犯してゆくこと、そしてそれは普遍的であるこ

と、その根はどうしてもアダムにまでさか上らなければならないほどに根強いこと—こうしたことを私どもは原罪として確認しておかなければならないと思います。」

「『悪への傾向』、『罪への傾向』....これは恐らく、具体的な罪の行為以前の状態を指している表現であると思われます。.....キリストには『原罪』はなかったということです。しかし、私には原罪があります。この違いは決定的です。」

すべての人は、この罪深さを相続していることは明らかではないだろうか。

しかし、人はこの罪深さを培っていくという事実も忘れてはならない。

体得される罪深さ

罪性＝罪深い性質＝罪への傾向は相続されるばかりでなく、体得される。

アダムはそれを体得によってのみ得た。我々はそれを相続する。

人あ上 48「罪のない夫婦が、悪を知ることは、神のみこころではなかった。神は、彼らに善を惜しみなく与えて、悪は、さしひかえておられた。それなのに、彼らは神の命令に反して、禁じられた木の実を食べてしまった。こうして彼らは、それを一生のあいだ食べ続け、**悪の知識**を持つことになる。」

教育 17「自然はもう恩恵(Goodness)だけをあらわすことはできなくなった。いたるところに悪が存在し、地も海も空気もそのけがれた手にふれて毒されている。かつては神のご品性、すなわち善の知識だけが書かれていたところに、今はそれと共に**サタンの品性である悪の知識**が書きしるされている。」

同 21「善悪を知る木の実を食べた結果は、すべての人間の経験にあらわれている。人の性質には**悪への傾向**、すなわち自力だけでは抵抗し得ない一つの力が働いている。」
悪の知識＝罪への傾向＝サタンの品性

生残 51「彼らの得た大いなる知恵というのは**罪の知識と罪悪感(Sense of guilt)**だった。」

罪の記録

罪を犯すと天使たちが**天の記録の書**にしるす。ダニエル7章、大争闘下 219

「ユダの罪は鉄の筆、金剛石のとがりをもってしるされ、彼らの**心の碑**と、祭壇の角に彫りつけられている。」エレミヤ 17:1

罪を犯すと**天にも記録**されるし、**魂の宮にも記録**される。

実物 140,141「『その時あなたがたは自身の悪しきおこないと良からぬわざとを覚えて、その罪と、その憎むべきことのために、みずから憎む』と主が言っておられるのは、主がおゆるしになった人々、すなわち主がご自分の民としてお認めになった人々に対してである。」(エゼ 36:31

TM417

「あなたは今悔い改めることが出来るであろう。しかしたとえ許しがあなたの名前のところに書かれたとしても、あなたはたいへんな損失をこうむることになる。なぜならあなたが自分の**魂のうえにつくった傷は残る**からである。」

FE 195「悪しき思いを持つものはその**魂の上に刻印を残す**。」

RH1/13/1891「すべてのクリスチャンは悪い習慣とのはげしい戦いを経験する。彼は自分の不信仰、品性の欠点、放縦になる傾向に打ち勝たねばならない。光、警告、訴えに対する彼の永い間の反抗はその**生涯にその傷跡**を残している。そのため、たとえ主は彼をお許しになっても彼は自分自身を許すことはできないと感ずるのである。」

家教 202「子供が見たり聞いたりすることは、柔らかな**心に深い傷**をひいていきます。その後のどんな環境も、それをすっかり消してしまうことはできません。」

3BC1158「彼は悔い改めたかも知れない。他人にたいしてした自分の不正を認め、でき得るかぎり**の償い**をするかも知れない。しかし、**傷つけられた良心の傷跡はいつまでも残る**のである」

希中8「主は、悔い改めた罪人をおゆるしになるだろうし、また実際おゆるしになるが、しかしゆるされても、その**魂はそこなわ**れている。」

OHC227「すべての失敗、すべてのあやまち、重要でないと思なされるかもしれないが、その**生涯に傷跡を残し、天の記録にシミを残す。**」

青年 138「自分の思うことによほど気をつけなければなりません。というのはたった一つの不純な思いも**魂に悪いこん跡(impress)**を与えるからです。」

※ 「いつまでも残る」ということは「永久に」という意味ではない。「死ぬときまでか、さばきの時まで」「恩恵期間中生きている間」の意味である。

- いつ罪は記録されるか？ 罪を犯した時か？ 罪を告白した時か？

罪のとがめ、罪責

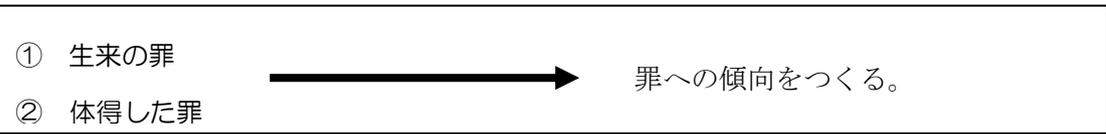
レビ4章・5章を見ると次のことが観察できる:

罪を犯して知るようになったとき、とが(ギルト)を得る=罪悪感、罪意識、とがめ。4:13,22,27; 5:1-4

犯す罪に二種類ある:

1. **無知の罪** 4:13—あやまちを犯し、4:22, 27—あやまって、使徒 17:30「神はこのような無知の時代を、これまでは見過ごしにされてきたが」、ルカ 23:34「父よ、彼らをお許してください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」、詩篇 19:12「あやまち」「隠れたとが」
2. **故意の罪** 詩篇 19:13、民 15:30、ヘブル 10:26「ことさらに」

罪を犯して、罪悪感、罪意識を得る。エレミヤは罪を犯した時、魂の至聖所「心の碑」にそれが記録されるばかりでなく、「あなたの祭壇の角に彫りつけられている」と言う。聖所の祭壇の角のこと。



イザヤ 1:5,6 「…その頭はことごとく痛み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで、完全なところがなく、傷と打ち傷と生傷ばかりだ。」

エレミヤ 17:9 「心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。誰がこれを、よく知ることができようか。」

人間の心の不可解な醜さはどこで最高に現されたか？

1. 希上 46 「カルバリーの十字架に、愛と利己心が向かい合って立った。ここにこの両者（キリストとサタンの思い）の最高のあらわれがあった。」 「キリストの一生と死によって人の思いもまた明るみに出た。」

希下 286 「サタンは自分の仮面がはがされたことを知った。…彼は殺人者の正体を現わしたのであった。」

2. 人間も神の位置にのし上がろうとした。(創 3:5) 故に人間の心にはサタンと同じ精神があり、同じ罪がある。

① 1ヨハネ 3:8 「罪を犯すものは、悪魔から出たものである。」

② ロマ 8:7 「肉の思いは（心）神に敵する。」

③ 1ヨハネ 3:15 「すべて兄弟（あるいは神）を憎む者は人殺しである。」

④ RH4-16, 1901 「すべての犯す罪は最初の罪(Original Sin)をこだまさせているのである。」

⑤ 希下 263 「すべての者の上に神のみ子を十字架につけた罪がおかれている。」

同上 「敵のために祈られたキリストの祈りは世界を包含していた。それは、世の始めから時の終わりまで、かつて生存し、これからも生存するすべての罪人を含んでいた。」

⑥ 人の心はその恐ろしさを意識しない。

ルカ 23:34

使徒 3:14-17 「あなたがたは知らずにあのようなことをした…」とユダヤ人をペテロは責める。

エレミヤ 17:9 「人の心の深さよ、それはよろずのものより深く、悪に傾いている。誰がこれをはかり知ることができえよう。」

MM143 「人間の心の醜さは理解されていない。」

⑦ ラオデキヤの罪は「気がついていない」ことである。

⑧ 讚美歌262:

十字架のうえに われは仰ぐ わがため悩める 神のみ子を
妙にもとうとき 神の愛よ！ 底いも知られぬ 人の罪よ！

キリストなしには正しくなり得ない人間の無能力について何とされているか？

① 人は罪過と罪とによって死んでいる。エペソ 2:1

② 人は悔い改めることさえできない。使徒 5:31

「このような悔い改めは、自分の力ではとてもできるものではない。これは天にお上りにな

って、人類に聖霊の賜物を与えたもうキリストによるしかないのである。」キ道27;1SM390, 393

- ③ 主を求めることができないし、その願望さえない。ロマ 3:11
- ④ 「律法の靈性を理解する者は、その罪を指摘するものとしての力を知る。だれでも皆、**我々のあがない**(atonement 神と一つになる)であるイエス・キリストの救済の犠牲において、彼らのために備えられたあがないを受け入れなければ、**サタン自身と同じように全く無力な状態である。**」 6BC1077

※ 完全墮落説は善良な特質、徳が人間に全然存在しないということではない。墮落したとはいえ肉体的、知的、道徳的な能力が与えられ、なおも神のみ形を残している。人情、親切、寛容さ等々…と各人先天的に、後天的に備わっているものがある。しかし、それらはタラントであって、品性を構成しない。(4T606、キ実328) 信仰、希望、愛…も品性の特質(elements)、要素であるが、(家教171) 道徳的能力とも呼ばれている。しかし、これらの特質や、徳も罪性=利己心ですべて汚されているのである。(イザヤ 64:6、1SM342)

まとめ:

1. 我々はサタンの精神=原罪=**罪性**=罪深い性質=利己心=自己依存=品性の欠点=悪の知識=罪への傾向ですべての者が汚されている。
2. **罪の記録**=しみ、しわ、魂の傷で汚されている。
罪責=とがめ=罪悪感で汚されている。
3. これを受け継いで生まれてくるので神との交わり、人間自らの義なる行為は不可能である。
4. それ故に、我々はだれをもさばく事はできない。
5. その魔性をほんとうに理解している人はいない(エレミヤ 17:9)。すべての人間が創造主を十字架につけた。
6. 「古き人」を改善する望みはない。そのままでは神を愛し、神に仕えることはできない。どんな修養も、改革も、誇り得る道徳的原則も、標準に達するためには役に立たない。悪い実を全部もぎとって、その木を変えることはできない。腐れた木のままである。斧は根元に置かれなければならない。
7. 生来の罪性の現実が理解されないと福音は力を失う。「わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことをわたしは知っている」と言える人は幸いである。(ロマ 7:18) こういう人こそ、神の恵みが人のためにするあがないの働きをほんとうに感謝することができる。

次のような考えは至聖所における「最後のあがない」「特別なあがない」の働きを必要としない。聖化の働き、即ち聖所の働きだけでよいのである。

- ① 人は生まれながらにして罪人ではない、自分の意志で罪を犯して罪人となる、意志して罪を犯さなくなるまで清まれば完全に達し、さばきの座に出廷できるという考え。
- ② 罪の行為は止むが、罪の根=罪性は再臨まで残る。故に罪なき完全な品性はこの地上では不可能であるという考え。
- ③ 新生の経験において、罪性も含めてすべての罪が清められる。もう罪はない。この状態を維持

すればいい、という考え。

これらの考えは婚姻の招待を拒んでいることになる大争闘下 142-5)。拒む人々はどうなるだろうか？

婚姻に来たれ！

裁きの時＝聖所の清めの時＝最後のあがないの時＝婚姻の時は、罪責、罪性、罪の記録が永久に取り除かれ、解放される時である。完全に聖霊に満たされ、神性と人性が結合される時である。(実物 287) 罪性は「最後のあがない」の時にきよめられる。改心の時でもなく、再臨の時でもない。

*日本語訳聖書に「婚宴」と訳されているのは「婚姻」のことである。小羊の婚宴は再臨のあとに、天国で行われる。順序は1. 調査審判—婚姻、2. 再臨、3. 天国での小羊の婚宴となる。

Ⅲ. 神の罪の処理法

いやしと清めの福音

人間がどんなに罪深くとも失望するには及ばない。神に返る道が、キリストによって聖所に提供されているのを見る。贖罪＝あがない(atonement)—神と一つになる—方法があるのだ。

「見よ、主の手が短くて、救い得ないのではない。その耳が鈍くて聞き得ないでもない。
ただ、あなたがたの不義があなたがたと、あなたがたの神との間を隔てたのだ。またあなたがたの罪が主の顔をおおったために、お聞きにならないのだ。」イザヤ 59:1,2

そのためには、罪の問題が処理されなければならない。「神の道(方法)は聖所にある」詩篇 77:13

罪の問題が最も組織的に、処理され、きよめられ、あがなわれ、神と一つになる方法が記されているのは、旧約のレビ記である。聖所全体にその道(方法)を見ることができる。新約聖書の福音書とヘブル書にはその実体が記されている。

1. レビ 14:20 「そして祭司は燔祭と素祭とを祭壇の上にささげ、その人のために、あがないをしなければならぬ。こうしてその人は清くなるであろう。」
2. 14:31 「すなわち、その手の届くもの一つを罪祭とし、他の一つを燔祭として素祭と共にささげなければならぬ。こうして祭司は清められる者のために、主の前にあがないをするであろう。」
3. 14:53 「その生きている小鳥は町の外の野に放して、その家のために、あがないをしなければならぬ。こうして、それは清くなるであろう。」
4. 16:30 「この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである。」

これらの聖句に「あがない」と「清める」が同意語的に用いられている。これは、主があがないを提供されるといふとき、同時に清めが提供されていることを意味する。だから、最後のあがないにおいて、すべての汚れから清められ、イエスのみ像を完全に反映するのである。こうして彼らは生ける神の印を受けるのである。

聖所の奉仕には二つの部分がある—罪が清められる行程

聖所の奉仕は二つの部分から成っている（大争闘下 131、人あ上 414）：

ヘブル 9:6 「これらのものが、以上のように整えられた上で、祭司たちは常に幕屋の前の場所には行って礼拝をするのであるが、幕屋の奥には大祭司が年に一度だけはいるのであり、しかも自分自身と民とのあやまちのためにささげる血をたずさえないで行くことはない。」

この二つの部分は：「日毎の奉仕」「年毎の奉仕」と呼ばれた。日毎の奉仕は幕屋の庭の祭壇と聖所で行われた。年毎の奉仕は至聖所で行われた。あがない=清めの働きは二つの奉仕によって完成されるのであった。魂の回復には二つの部屋の二つの奉仕が必要で、どちらか一方だけでは決して完成しない。

聖所の奉仕の目的:

最も重要なポイントを忘れてはならない。それは何か？

我々は生ける神の宮であるということ。神が最も関心を持っておられるのは人間である。人間を通して神のご品性が擁護されなければ、キリストとサタンの大争闘は終わらないのである。

「こうしたすべての象徴を通して、神は、人の魂についてどんな目的をもっておられるかということを彼らがさとするように望まれた。」教育 29

日毎の奉仕と我々の魂とはどんな関係があるのだろうか。至聖所における年毎の奉仕は、我々の魂とどんな関係があるのだろうか。

日毎の奉仕:

イスラエルの会衆一人が罪に汚されたとする。彼は聖所を見る。彼のために朝夕の供え物が備えられているのを見る。煙が立ち上っているのを見る。神が自分を受け入れてくださる確証を見て、群れの中から犠牲を取って聖所の門をくぐる。祭壇の北の方に立って彼は自分の連れてきた犠牲に罪を告白する。罪のない犠牲に手をおいてその犠牲と自分を同一視する。そして自分の手でその命を取る。この無垢の犠牲を殺すのは自分の罪だと認める。自分のそばに立っている祭司が犠牲の血を取って聖所に持っていく。至聖所の幕（とばり）の前の香壇の角に血を注ぐ。こうして型において、罪人の罪は聖所に移された。

人あ上 416-420 ; 大争闘下 131 を読んでいただきたい。

先に進む前に、ここで、「罪の記録」と「罪の移行」について考えてみよう。

罪の記録がなされるのは、罪を告白した時か、それとも罪を犯した時か？

罪が記録されるのは罪を告白した時に血によって記録されるのではない。罪を犯した時に記録されることを学んだ。無垢の犠牲に告白し、聖所に移されるのは罪責(とがめ)である。罪の移行と罪の記録は同じではない。この二つは全く異なるものである。聖所と至聖所が異なるように。

罪を犯した時	→	罪の記録	→	至聖所に
罪を告白した時	→	罪の移行	→	聖所に

型において罪人の罪責は聖所の香壇の角に移された。罪人は罪責から解放された。

実体においても罪は天の聖所へ移されることによって罪責から清められて自由の身になった。

1 ヨハネ 1:9 もし罪を告白するならば、その罪をゆるしわたしたちをきよめて下さる(告白した罪)。

しかし、罪の記録は至聖所の記録の書に残ったままである。

記録の書については後に学ぶ。

義認の経験

キリストへの道の本と聖所に見るステップが同じであることを見よ。

<p>1 章—神の愛: 2 章—キリストの必要: 3 章—悔い改め: 4 章—告白: 5 章—献身:</p> <div data-bbox="172 1377 667 1608" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"><p>救いの方程式 キリストの我々のための働き 聖霊の我々の中になされる働き</p></div> <p>6 章—信仰と受け入れ:</p>	<p>祭壇に十字架を仰ぐ 犠牲の供え物をつれてきて 悔い改めと信仰の門(使徒 2:38;5:31)を通して、 犠牲の上に手をおいて罪を告白。1 ヨハネ 1:9 罪を犠牲に移す。「古代において、民の罪が、信仰によ って罪祭の上におかれ、そしてその血によって、象徴的 に地上の聖所に移されたように、新しい契約において は、悔い改めた者の罪は、信仰によってキリストの上 におかれ、そして実際に天の聖所に移されるのである。」 大争闘下 136 祭壇—キリストと共に自分は十字架につけられる。 ガラ 2:19、ロマ 6 章。生ける供えものとして、ロマ 1 2:1 洗盤—「再生の洗い」テトス 3:5 聖霊による新生の経験—これは義認の経験に必ず伴 う。新たに生まれる経験(ヨハネ 3 章)。 ①「もし自分をキリストにささげ、キリストを自分の 救い主として受け入れるならば、その生涯はこれまでい かに罪深きものであっても、かれのゆえに義とみなされ るのであります。キリストの品性があなたの品性の代り となり、<u>神の前に全然罪を犯したことの無いものとして 受け入れられるのであります。</u>」 ②「こればかりでなく、キリストは私どもの心までも <u>変えてくださいます。</u>信仰によって、キリストは心のう ちに住みたまいます。」キリストへの道 82 「わたしどもの唯一の希望は、①キリストの義が私ど もに被せられることと、②私どものうちに働き、私ども を通して働いてくださる聖霊の働きによるほかは ないのであります。」同 83 次の文はまとめてこう書いてある: キ道 63「あなたは自分の罪を告白した、心よりこれを</p>
---	---

捨て去った、神に自らをささげようと決心した。そこで今、神のもとに行き罪を洗い去って新しい心を与えたまえと願いなさい。そして、神がお約束なさったのであるから、そうしてくださると信じなさい。」

義認は過去の罪のゆるし以上のことを意味する:

(1)祝福143「神のゆるしは、罪の宣告から私達を解放する法的行為であるばかりではない。それは罪のゆるしであるだけでなく、わたしたちを罪から取り戻すことである。心を変えるものは、あふれでる贖罪的愛である。ダビデは、『神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください』と祈った時、許しということを正しく理解していた。また彼は、『東が西から遠いように、主はわれらのとがをわれらから遠ざけられる』と言っている。」

(2)ST12-17, 1902「義認は許しを意味する。それは死んだわざから清めて、聖化の祝福を受けるのに備えるのである。」

(3)TM456「信仰による義認とは何か? それは人間の栄光をチリに伏させ、自分の力ではできないことを、人間のためになさる神の働きである。」

(4)実物88「この信仰は、悔い改めと心の変化とも切り離すことはできない。」

(5)1SM366「…知っている罪を犯しながら、また知っている義務を怠りながら、だれもキリストの義の衣で覆われることはできない。義認が起こる前に、神は心の全き降伏を要求なさる。」

義認は必ず新生を伴う:

心の中の原罪の支配力を打ち砕き、それはもはや心を支配しない。

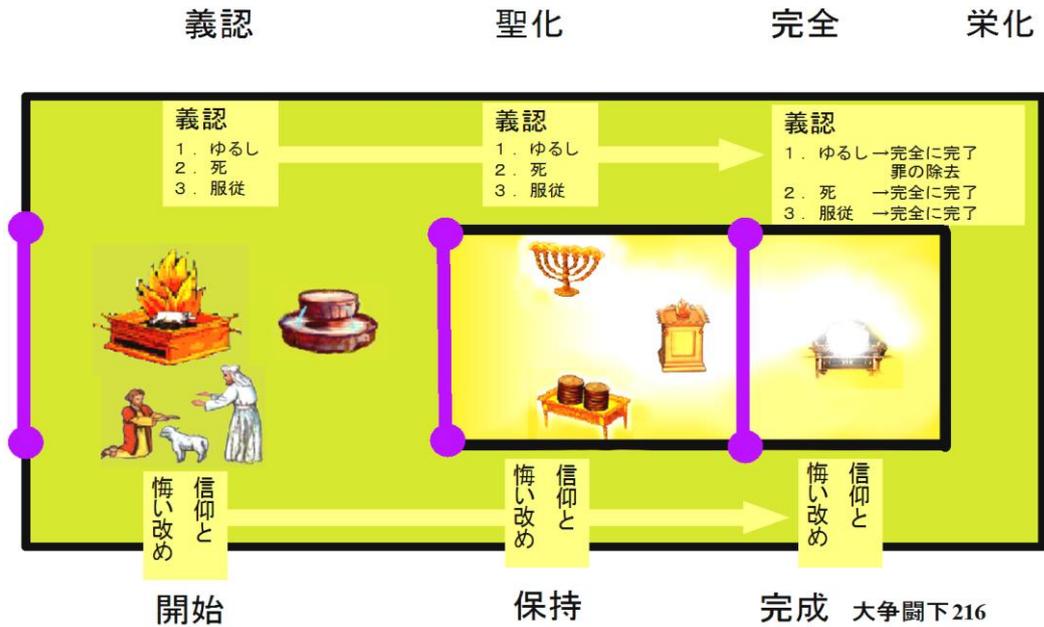
それは新しい傾向、動機、欲求を与え、信者を神の性質にあずかるものとする。

この時点でキリストの完全が我々に着せられる。つまり、義認の経験である。

そもそも信仰による義認の原則は、ローマ書に最も顕著に説かれている:

- | | |
|---------------------------------|------------|
| 1. 信仰による義認—無償で与えられる赦しの賜物—— 3～5章 | 第一天使の使命の原則 |
| 2. 信仰による義認—罪からの清め、解放、自我に死ぬ—6&7章 | 第二天使の使命の原則 |
| 3. 信仰による義認—服従を伴う—第三天使の使命—— 8章 | 第三天使の使命の原則 |

1. 2. 3. の経験は分離できない。罪からの解放、清め、自我に死ぬ経験が伴わなければ、義認ではない。服従が伴わなければ義認ではない。福音は「信仰の服従に至らせる」のである。ローマ 1:5、16:25。この三つの経験はセットである。三天使の使命が結合した使命であるように、信仰による義認のこの三つの経験は、義認が結合したものであることを示している。それは“radical change”「大いなる変化」「徹底的変化」をもたらす。



聖化—義認の経験の維持であり、ますます深まる経験である。

聖化とは、この義認の経験の持続であり、更なる深い経験へ進歩することなのである。ということは、もっと深い悔い改め、更なる信仰によってイエスに依存することである。なぜなら、キリストに近づけば近づくほど、その純潔さがはっきり見えるようになり、ますます自分の罪深さに気がつき、イエスへの依存度が高くなる。

1. 1 SM397 「…信者はキリストのわざをすることによって絶えず進歩する経験を持たなければならない。義認の祝福が維持されるのは絶えず意志をささげること、絶えざる服従によってである。」(1 SM366参照)
2. 患下264 「クリスチャン経験において一步進むごとにわれわれの悔い改めは深まる。」

そのために、神のみ言葉（パンの机）、祈り（香壇）、聖霊のはたらき（燭台）が絶えず必要なのである。日毎に義認の経験が深まるということは、ますます罪を深く認める。ますます深く悔いる。ますます主に依存する。ますます神の性質＝ご品性＝無我の精神にあずかる。ますます自己依存、自己中心が打ちのめされる。

キリストに近づけば近づくほどどんな経験へと導かれるか？

3. キリストへの道 86 「イエスに近づけば近づくほど、ますます欠点が多く見えてきます。それは自分の目が開けて明らかになり、イエスの完全さに比べて、自分の不完全さが大きくはっきりと見えるからです。これは悪魔の惑わしの力が失われ、人を生かす神のみたまの力が働いている証拠であります。」
4. 大争闘下 200 「彼らは、自分たちの罪が、神のみ子の心臓を破裂させるほどの苦悩を引き起こしたことを感じる。そしてこの思いが、彼らをへりくだらせる。イエスに最も近く生活する者が、人間の弱さと罪深さを最もはっきりと認める。」
5. 大争闘下 202 「また、自分には罪がないと主張する者は、そう主張すること自体が、清めから程遠い証拠である。そのような主張は、彼が、神の無限の純潔と神聖さを真に認識していないためである。あるいは、神の品性と調和するためにはどのようにならなければならないかを、悟らないためである。イエスの純潔と気高い美しさを知らず、罪の邪悪さと

害悪を真に理解しないために、人は自分を清いものと考えてるのである。自分とキリストの間の距離が、遠ければ遠いほど、また、神の品性と要求に対する見解が不十分であればあるほど、人間は、自分自身の目に正しく思われるのである。」

6. 大争闘下 327 「人は**道徳的完全さに近づくにつれて、その感覚は鋭くなり、罪をいっそう鋭く感ずる**ようになり、苦しむ者に対する同情がますます深くなる。」
7. 希望上 104 ヨハネはイエスの美しさをながめて自分を忘れた。自分の無力さと無価値さを感じた。
8. 患難下 264 「使徒や預言者たちの中には、だれも罪がないと主張した者はいない。神に最も近く生きた人々、知っていて悪い行ないをするよりはいのちを犠牲にしようとする人々、神が聖なる光と権能をもって称賛した人々は、自分たちの性質の罪深さを告白してきた。キリストを見る者たちはみな、このようになる。イエスに近づけば近づくほど、そしてキリストのご品性の純潔さが更にはっきり認められるようになればなるほど、ますます罪のひどい罪深さを明らかに見るようになり、われわれ自身を高める気持ちはますます消えていく。魂は神を求めて絶えず手を伸ばし、罪の悲痛な告白を絶えず、まじめにささげて、神のみ前に心を謙虚にする。」ピリピ 3:13 参照。
9. 3SM427「しかし、そのことが来る前に(再臨)、**我々の内にあるすべての不完全さが表わし示され、そしてとりのぞかれる**であろう。」

ある人たちは十分な時間が与えられたら、普通の聖化のコースをたどって罪なき完全な品性に到達すると思っている。決してそうではない！！

10. 国指下 193-196 神の印が押される前、**罪深さと無価値さの認識が頂点に達する。さばきにおいて「心の純潔を嘆願する」**のである。(完全になってさばきに臨むのではない。)
11. 大争闘下 216 最後のあがないにおいて、イエスは完全で十分な許しと義認を嘆願なさる。
12. 2T505 「すべての生きたクリスチャンは神の生命に日毎に進んでいく。完全に向かって進んでいくとき、彼は毎日悔い改めを経験する。そしてこの**悔い改めは、最後の不死の仕上げのための完全な準備、すなわち完全なクリスチャン品性の完成に到達するまでは終わらない**のである。」

つまり、悔い改めは完全な品性の到達で終るのである。

● **聖化は完全ではない！罪性＝原罪と罪の記録は残っている。だから、まだ完全ではない！**

13. 4T367「人は生きた頭であるキリストに向かって成長する。それは一瞬の働きでなく、一生の働きである。神の生命に日毎に成長することによっては、その人の**恩恵期間が閉じるまでは、キリストにあって完全なみ像に到達しない。**」

日毎の清めは知っている罪からの清めである。ギルト（罪責、とがめ）から清められ、良心のとがめはなくなるのである。ヘブル 10:22、使徒 24:16

レビ 4章・5章を見ると、ゆるし、あがない、清めが同じように使われている。

聖所の奉仕には二つあった:日毎のあがない、年毎のあがない。日毎のあがないは完全なあがないではなかった。

14. 人あ上 420「一年間にわたってささげられてきた罪祭によって、罪人に代わるものが受け入

れられてきた。だが、いけにえの血が罪に対する完全なあがないを果たしたのではなかった。」

「あがない」と「清め」という言葉は同意語のように用いられていることを覚えよう。

【ディスカッション】

罪の記録というと天の記録としか考えないから、S D Aの聖所の清めに関する教理は迫力を失ってしまうのである。

心に記録が残るということは、子供、青少年の教育にどんなに重要か？

罪性＝原罪を持って生まれてくることは、しつけにどう関係するだろうか？

またクリスチャン生活にどんな影響を与えるだろうか？

15. 生残 51「彼ら（アダムとエバ）の得た大いなる知恵というのは**罪の知識と罪悪感**だった。」

罪責、とがめ、罪悪感(ギルト)は悔い改めて告白する時に取り除かれる。しかし、罪の知識は人の恩恵期間が終わるまで一生残るものである。それは罪についての知識ではなく、実際の罪の経験である。（5 T504）

16. キ道 86「イエスに近づけば近づくほど、ますます欠点が多く見えてきます。それは自分の目が開けて明らかになり、イエスの完全さに比べて、自分の不完全さが大きくはっきりと見えるからです。これは悪魔の惑わしの力が失われ、人を生かす神のみたまの力が働いている証拠であります。

自分の罪深さを悟らない人の心には、イエスに対する深い愛もやどりません。キリストの恵みによって造りかえられた魂は、キリストのきよい品性をほめたたえます。しかし、もし、私どもが自分の道徳的欠陥を知らないとすれば、それは、キリストの美しくすぐれた品性をまだ見たことがないという明らかな証拠であります。」

17. RH11-29, 1887「生来の罪との格闘があり、外部の悪との戦いがある。」

18. OHC121「我々が信仰によってキリストをとらえるとき、我々の働きは始まったばかりである。すべての者は激しい戦いによって勝利しなければならない腐敗した、罪深い習慣を持っている。」

19. 患下 170「古い習慣、悪への生来の傾向が、支配力をふるおうとするであろうから、これらに対していつも油断なく見張り、勝利を得るためにキリストの力によって戦わねばならない。」

20. 国指下 193-196 絶望するばかりの深い罪深さを認め、「心が純潔になることを嘆願する。」

▲ **罪への傾向＝古い習慣**の使いかたに注目せよ。

21. キ実 140「使徒にしても、預言者にしても自分には罪がないと主張した者は一人もいない。神の最も近く生活した人、知りつつ罪を犯すよりは、むしろ生命を犠牲にした人、また、神からの特別な光と力とを与えられた人は、みな、自分たちの性質の罪深いことを告白している。」

22. 4 T 496「人間の心の中には生まれつきの利己心と腐敗があり、徹底的な訓練と厳しい抑制によってのみ克服できる。それでも忍耐深い努力と熱心な抵抗が要求される。」

23. ST9-27,1882 「天よりの恵みの影響下にあって、品性の悪い特徴は確実に弱まっていく一方、

すべての良い性質は力強くなっていく。」

24. 7BC943 「我々は罪への傾向をひとつも持ち続ける必要はない。...我々が神のご性質にあずかるにつれて、遺伝的また後天的悪への傾向は品性から切り離され、我々は善のために生きた力となる。」

聖化で覚えるべき重要な2点

1. 自己との激しい戦い
2. キリストに近づけば近づくほど罪深さの意識は増す。

このことを理解しないと失望する。

「こうした生活を送り、こうした感化を及ぼすためには一歩一歩、努力と自己犠牲と鍛錬がいる。このことを理解しないため多くの者がクリスチャン生活にすぐ失望してしまう。真心から神の働きに献身する多くの人々が、従来に見ないほど妨害を受け、試練や困難に襲われて驚き、失望する。主の働きにふさわしい者となるために彼らはキリストのような品性を求めて祈っているが、自分の持っている悪い性質しか引き出せないような事情におかれている。

そして、持っているとは思わなかった短所があらわれ、昔のイスラエルびとのように「神が導いておられるなら、どうしてこんなことがわたしたちに起るのだろう」と尋ねる。

神が導いておられるからこそ、こうしたことが彼らの上で起るのである。試練や困難は神がお選びになった鍛錬の手段であって、神が定められた成功の条件である。人の心の中をごらんになる神は、人間が自分自身を知る以上に人間の性質を知っておられる。正しく指導すれば神の働きを進展させるのに用いることができる能力や感受性を持っている人々がいることを知っておられ、摂理によってこうした人をいろいろ異なる地位や各種の境遇に導かれるのであるが、それはその人自身知らなかった自己の欠陥を発見するためである。神はこうした欠陥を改める機会を与え、神の働きに適する者となる機会を与えられる。そして、きよめられるためにしばしば火のような試練が彼らを襲うことを許されるのである。」ミニストリー 454-455

1. 自己との激しい戦い。

「救い主の仲保の恵みにあずかりたいと思うものは、神を畏れつつ聖潔を完成していくというその義務を、何ものにも妨げられてはならない。」大争闘下 221

「キリストの克己と謙そんを見上げる者は、ダニエルが人の子のようなおかたを見た時言ったように、「力が抜け去り、わが顔の輝きは恐ろしく変って、全く力がなくなった」と言わないではいられない(ダニエル 10:8)。わたしたちが誇る自立と自己至上主義は、サタンの配下であるしるしとして、その真の邪悪さが示される。人間の本性は、たえず自己を表現しようと戦い、競争している。しかしキリストに学ぶ者は、自己、誇り、至上権を愛する心がなくなり、心の中はおだやかになる。自我は聖霊の指導に服従する。その時わたしたちは最高の地位を得たいと望まなくなる。わたしたちは他人をおしのけて自分に注目をひくことを望

まない。わたしたちの最高の地位は、救い主の足下にあると思うのである。わたしたちは導きのみ手を待ち望み、み声を聞こうとしてイエスを仰ぎ見るのである。使徒パウロはこの経験をもった。彼は「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである」と語った(ガラテヤ 2:19,20)。」 祝福 18 (E15)

「信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたは、そのために召され、多くの証人の前で、りっぱなあかしをしたのである。」1 テモテ 6:12

「わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。」2 テモテ 4:7

「狭い戸口からはいるように努めなさい。」(ルカ 13:24)

祝福 176 (E141) 「日の暮れる前に町の門に着こうと急いでいる遅れた旅人は、途中にあるものに心をひかれてわき道へそれることはできなかった。彼は門にはいるということしか考えていなかった。これと同じ強い目的がクリスチャン生活には要求されるとイエスは言われたのである。わたしはあなたがたに、品性の栄光を示した。これがわたしの国の真の栄光である。それはあなたがたに地上の支配権を与えるという約束はしない。しかし、それは、あなたがたの最高の希望と努力とに値するものである。わたしは世界大帝国の主権のために戦うようにあなたがたを召したのではない。しかし、それだからといって、何の戦いもせず、勝利を得なくてもよいなどと考えるてはならない。わたしは、あなたがたに、わたしの霊的王国にはいるために戦い、苦心せよと命じるのである。

クリスチャンの生涯は戦いであり、進軍である。しかし、勝利は人間の力では得られない。戦場は心の中にある。わたしたちの戦い、すなわち、人間の戦わなければならない最も激しい戦いは、自己を神の意志に従わせること、心を愛の主権に屈服させることである。血肉による古い性質は、神の国をつぐことができない。生まれつきの性癖、古い習慣は捨てなければならない。

霊的王国にはいろいろと決心する者は、自分の生まれ変わらない性質のあらゆる力と欲望とが、暗黒の王国の勢力に支援されて、自分に手向かってくるのに気づくであろう。利己心と誇りとは、それが罪であることを指摘するすべてのものに対して反抗する。わたしたちは、自分を支配しようとする悪い欲望や習慣を自分で征服することはできない。わたしたちは、自分を奴隷の状態におく強い敵にうち勝つことはできない。わたしたちに勝利を与えることができるのは神だけである。神は、わたしたちが自分自身を、また、自分の意志や行動を支配することを望んでおられる。

しかし、神はわたしたちの同意と協力がなければ、わたしたちのうちにお働きになることはできない。聖霊は、人に与えられた才能と能力を通して働くのである。わたしたちの精力は神と協力するよう要求されている。」

実物 305 (331) 「とは言うものの、キリストは、品性を完成することがやさしいことであるとは、保証しておられない。高潔で円満な品性というものは、親から遺伝的にうけつぐものでは

ない。また、偶然、ころがり込むものでもない。高潔な品性は、キリストの功績と恵みによって、人びとが努力することによって得られるものである。神は、タラント、すなわち、精神の能力をお与えになる。そして、わたしたちが、品性を形成するのである。品性は、自己とのきびしい戦いによって形成される。生来の傾向に対しては、争闘に次ぐに争闘をもって当たらなければならない。わたしたちは、きびしく自己を批判して、一つとして汚点を取り除かないで放っておくようなことをしてはならない。」

真の聖化と偽のリバイバルについて大争闘下 27 章 192～(E465、特に 468) を読む時、今日の安価な恵みがどんなに誤っているかに気づくであろう。

誤った律法観 192～

律法軽視の福音？今日の風潮、セレブレーション、
克己と努力
全人的清め

患難下 55 章の真の清めについての個所も読んでほしい。

完全に向かって絶え間ない自己との戦い。268
聖潔の道に進歩しない理由。

ミニストリー99 ページの健康改革の面における戦い

先天的、後天的傾向性癖との戦い。

2. 罪深さの意識の増加↑

このことについては、すでに多くに引用文を挙げておいた。

宗教改革者の証:

- ① ルター「だから原罪はクリスチャンが死ぬまで残る。…」Table talk, Martin Luther, CCLVI
「しかし、我々はこのことを知るべきである。すなわち、罪は、恩恵の行使のため（恵みが働くため）、高慢を打ち砕くため、なまいき（でしゃばり）を抑制するために、霊的な人に残されている。」 Works of Martin Luther, Vol.III, p17-19
「罪はバプテスマの後に残る。すべての罪は洗いさられるが、しかし、まだ洗いを要する何かが残っている。…この世の巡礼者である聖徒たちのすべての善行も罪である。…聖徒は義であると同時に不義である。」 SIMAL JUSTI ET PECATOIRES (シマル ジャスティ エト ペクトーレス) Martin Luther, Luther: Early Theological Works, The Library of Christian Classics, Vol.XVI, p317-324
- ② ウェスレー「信者に罪がないとか、肉の心、背教の傾向がないという立場は、神の言葉に、またその子らの経験に反する。…」
「キリストは罪が支配するところを支配することは確かにできないし、一つの罪でも許されている限り彼は支配なさらない。しかし、すべての罪と戦っているすべての信者の心におられ、お住みになる。たといそれが聖所の清めに従ってまだ清められていなくとも。」
「…罪は支配しないが、しかし、それは存在する」John Wesley, Wesley's Sermons, p12,13,21,34

わが教会の神学者

- ① エドワード・ハッペンストール「クリスチャンは、なおもその内に悪の泉、墮落した性質が残っていることを知っている。」ST 12-1963
- ② デスモンド・フォード「献身した信者は彼の上に(On him)罪はないが、彼の中に(in him)罪を持っている。ちょうどキリストが彼の中に(in Him)罪がなかったが、彼の上に(On Him)それを持っておられたように。」
- ③ ウィーランドとショート「信者はすべての知っている罪から清められているが、しかし、すべての無意識の罪からではない。」A Warning and its Reception, p390

上述の言葉は、(1)新生、聖化の経験の中にある信者にまだ罪性＝原罪が残っていること、(2)罪の記録が残っている故に更なる清め、あがないが必要だということ、(3)そのために聖徒たちの善行でさえ汚れていることを理解するであろう。

故に絶えざるキリストの功しが必要である！

1 SM344「我々の仲保者キリストと聖霊は、人のために絶えざる執り成しをしておられる。しかし、聖霊はキリストが世の初めから流されたご自分の血を提供して執り成されるように、我々のために懇願はしない。御霊は我々の心に働きかけて祈りと悔い改めと賛美と感謝を引き出される。我々の唇からほとばしり出る感謝は、聖霊が聖なる記憶の中の魂のコードに触れて、心の音楽を呼び覚ます結果である。」

「宗教的奉仕、祈り、賛美、罪を悔いた告白は天の聖所に香として真の信者からたち上るのであるが、人間の汚れた通路を通り過ぎるとき、それらが汚されるので血によって清められなければ、神のみ前に決して価値あるものとはならないのである。それで、神の右の座におられる仲保者がその義によってすべて清めて捧げられるのでなければ、神に受け入れられるものとはならない。」

「ああ、願わくはすべての者が悟るように。服従、悔い改め、賛美、感謝はすべてキリストの義の燃える炎の上に置かれなければならないことを！ この義の香りが雲のように恵みの座のまわりにたち上るのである。」

たとえ、良き行いが神から与えられた生命力によってなされたとしても、人間の性質の罪深さが、それらを汚す汚れた通路であり、この汚れた通路が残っている限り、聖徒たちは、そのはじめの清さで神の生命をお返しすることはできないのである。従って、彼らは聖所に仲保者なくして生きることはできないのである。イエスはすべての汚れから、われわれの祈り、よき働きを清め続けなければならないのである。そのために血が必要であり、仲保者に苦しみを与えているのである。そしてそのすべてを彼はその子らの救いのために喜んで耐えて下さるのである。

だからルターは聖徒の善行さえ罪で汚れていると言ったのである。ウェスレーも同じことを言っている。

QD687「我々がキリストの執り成しを必要とするのは絶えず続くのである。」

ただ罪を犯した時だけではない。隠れた罪深い性質＝原罪と罪の記録が残っているからである。我々の問題は罪を犯した時にキリストの仲保の必要を感じることである。

患下 232「人間の服従はキリストの義の香りによってのみ完全とされるのである。それがすべての服従の行為を神の香りで満たすのである。」

【ディスカッション】

上述の言葉にあるように、我々の服従も、賛美も感謝も、祈りも、宗教的奉仕も、すべての行為は汚れているならば、仲保者がいなくなった時に罪性と罪の記録を持ったまま神のみ前に立つことができるだろうか？

では神はどうなさるのか？

どこで、いつ完全にされるのだろうか？

完全な罪からの清め、品性の完成は新生の時でもなく、聖化の時でもないことは分かった。

それでは再臨の時か？

次の重要な点を覚えていよう！

大争闘下 221「サタンは、数えきれないほど多くの策略を考えだして我々の心を捕らえ、我々が最もよく知っていなければならない働きそのものについて、我々に考えさせまいとしている。大欺瞞者サタンは、贖罪の犠牲と全能者・仲保者を明らかにする大真理を憎んでいる。イエスと彼の真理から人々の心をそらすことに、万事がかかっていることを彼は知っているのである。」

初文 414-415「我々の使命は三天使の使命である」「我々の働きは、主の大いなる日に人々を備えさせることである。」

仲保者がいなくなった時のため、大いなる悩みの時のため、キリストの再臨の日に備えるためである。第三天使は天の至聖所を指して、すべての信者の心を大祭司イエスの最後のあがないに向ける。

1 SM327「第三天使の使命は信仰による義認そのものである。」

「…もし民がそれを完全に受け入れると、彼の力は打ち碎かれる。」

いつ完全に罪は除去されるのか？

混乱させる異なった意見:

1. 新生の経験で。アラン・スターケイ

「腐敗した罪の原則、悪の源、罪深い性質、無意識の罪も新生の経験で処理される」1968年、世界総会文書擁護委員会から出版された。

2. 全人類の恩恵期間が終わる時に。

しかし、「生ける義人は、恩恵期間が閉じる前に神の印を受ける。」のである。1SM66

3. 再臨の時に。

E・ハッペンストール

「古い人は我々の死、またはキリストの再臨の時まで我々の内に残る。」

「この原罪はクリスチャンと非クリスチャンに、彼らが死ぬか、昇天するまで残る」

「ここにこの地上での罪なき品性に関して最も厳粛な警告がある。クリスチャンは彼の内になお悪の泉、墮落した性質が残っていることを知っている」Definitions of Righteousness 18, ST,12-1963

T・バンチ「我々はイエスが来られる時にのみ完全にされることを覚えるべきである。」The Ministry,12-1965

R・S・ワッツ「我々はこの世では罪なき完全には到達できない。」RH,5-19,1966

D・フォード「我々の古い性質は主が再臨なさる時に、栄化される時に、ついに滅ぼされるのである。その時、我々の中に、我々の上に罪がなくなるのである。」（オーストラリア）ST,12-1963

ここが同じで、ここが違う！:

罪性＝原罪は死ぬまで残るといふのは、ルター達と同じである。

しかし、生きて主を迎える聖徒たちには適用しない。

すべての人は死んで後さばきを受け、最後のあがない（初代文集 415）、すなわち罪が除去され、復活する時にはキリストに似た者となっている（1ヨハネ 3:2）。

しかし、死なないで生きて主を迎える人たちは生きている間に調査審判—最後のあがない—罪の除去を経験する。

プロテスタント主義とアドベンチスト主義の二大黒柱

プロテスタンティズムとアドベンティズムの二大黒柱は永久に立つ。前者は罪性＝原罪は新生したクリスチャンに残るという真理を確立し、後者は、キリストの再臨まで生き残る者には、罪性＝原罪は残らないという真理を確立する。この二大黒柱を崩壊せんとするサムソンらがどこにいるか。彼らはダゴンの神殿を崩しているのではなく、天の聖所の二つの部屋を崩しているのである。

特別な清め—キリストが至聖所に入られた理由？

1844年キリストの再臨を待ち望んで人々は、すべてをかけて主に会う備えをした。彼らのなし得る経験について次のように描写されている.:

- ① 初代文集 393 「聖徒たちは、至るところで、厳粛で熱烈な祈りの精神を感じた。聖なる厳粛さが彼らの上に宿った。天使たちは、深い関心をもってメッセージの結果を見守り、それを受け入れた人々を高尚にし、この世のものから彼らを引き離して、救いの泉から豊かな供

給を得るようにと導いていた。その時、神の民は、神に受け入れられた。彼らの中には、イエスのお姿が反映されていたので、イエスは、喜びをもって彼らをごらんになった。彼らは、完全な犠牲と全的献身をしており、不死の姿に変えられることを期待していた。」

彼らは聖霊が示す罪を徹底的に悔い改め捨てた。完全な犠牲と全的献身をしてイエスはご自分のお姿が反映されていたのをお喜びになった。彼らは聖所の経験を十分にしていた。彼らは主に会う準備ができていたであろうか？

- ② 初代文集 399「彼らは、ふたたび、期待がはずれて失望した。…彼らは、清められて白くされ、精練されなければならない。」
- ③ 大争闘下 140 「しかし、人々は、まだ主に会う準備ができていなかった。まだ、彼らのためになされねばならぬ準備の働きがあった。彼らは、まず光を受けて、天にある神の宮に心を向けねばならなかった。そして彼らが、そこで奉仕しておられる彼らの大祭司に、信仰によって従っていくときに、新しい義務が示されるのであった。もう一つの警告と教えの使命が、教会に与えられるのであった。」

神の民は至聖所に心に向けなければならなかった。それが第三天使の使命の核心である。そこでなされる特別な清めに再臨待望者の心に向けるのであった。

そのもう一つの準備の働きとは何であったか？

- ④ 大争闘下 140, 141 「『その来る日には、だれが耐え得よう。そのあらわれる時には、だれが立ち得よう。彼は金をふきかける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼は銀をふきわけて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる』（マラキ 3:2,3）。

天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない。天で調査審判が行なわれ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行なわれなければならない。この働きは、黙示録 14 章の使命の中にさらに明瞭に示されている。

この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。『その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる』（マラキ 3:4）。その時、主が再臨されてご自分のもとに受け入れられる教会は、『しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、……栄光の姿の教会』である（エペソ 5:27）。また、その教会は、『しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者』である（雅歌 6:10）。」

「そのくる日には」というのは、再臨前の厳粛な調査審判のこと。「日の老いたる者のもとに来る」、即ちさばきの座に来ることを意味している（ダニエル 7:13）。

この文章の要約:

- 1) 調査審判

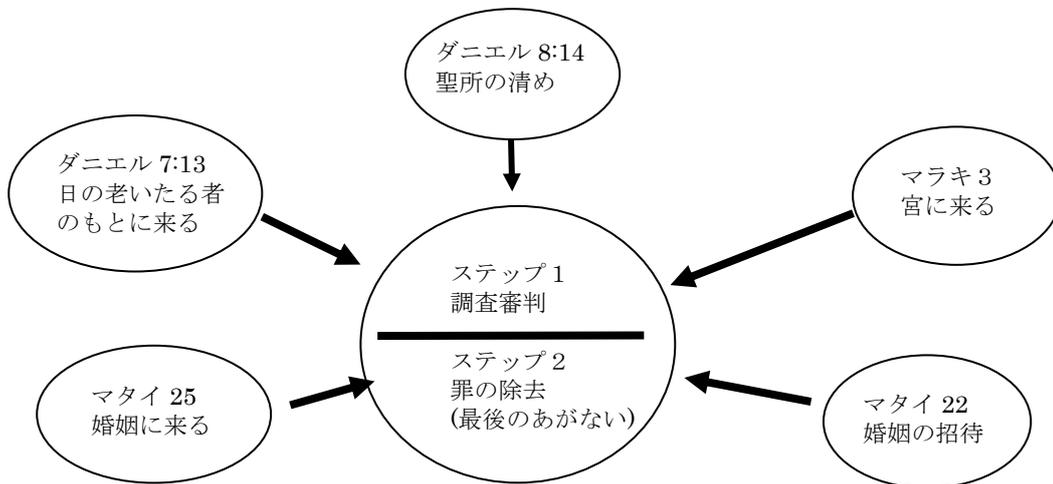
2) 特別な清め=罪の除去

3) 教会の栄光の姿

- ⑤ 初文 413「1844年に、天の聖所に入り、彼の仲保の働きによって恵みにあずかるすべての者のために最後のあがないをなし、こうして、聖所をお清めになるのであった。」
- ⑥ 大争闘下 142「ダニエル 8:14 に示されているところの、キリストが我々の大祭司として、聖所を清めるために至聖所に来られるということ、ダニエル 7:13 に提示されている、人の子が日の老いたる者のもとに来るとのこと、そしてマラキが預言した主がその宮に来られるということ、これらはみな、同じできごとの描写である。そして、これはまた、キリストがマタイによる福音書 25 章の 10 人のおとめのたとえの中で語られた、婚姻の席への花嫁の到着ということによっても表わされている。」

日本語の聖書と証の書の「婚宴」は「婚姻」に変えるべき。ここで用いられている「婚宴」は結婚式のことである。「小羊の婚宴」は再臨の後、天国で開かれるのである。大争闘下 143

- ⑦ 大争闘 145「マタイ 22 章のたとえにおいて、同じ婚姻の象徴が用いられている」



これらは再臨前の同じ出来事である。

マラキ 3:1-4「エルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる」とは、アダムとエバが罪を犯す前の状態のことである。つまり、「もろもろの罪」(レビ記 16:30)から清められた暁には、昔、アダムとエバが仲保者なしに礼拝と讚美と祈りを捧げたように神に喜ばれるという意味である。

聖所の清めは、(1)天の聖所の清めとしか教えられてこなかったし、残りの民に何の関係もないと思っている信者が多い。聖所の清めは天の記録簿から罪を除くことだけか？ほんとの聖所の目的は何か？あるいは、(2)聖所の奉仕と至聖所の奉仕の違いも悟らず、ホーリネス以上の考えを持たない。知っている罪に全部勝利すれば、完全だと思い、再臨を迎える事ができると考える。レビ 4 章～6 章に日毎の奉仕で、ゆるされ、清められ、あがなわれているのに、どうしてレビ 16:30 にある清めが必要なのか？この時に誰が清められるのか？レビの子孫とは誰のことか？

清められる何がまだ残っているのだろうか？ **罪性**と**罪の記録**である。

- ⑧ 使徒 3:19 (1)悔い改め (2)罪の除去—(3)後の雨 (4)再臨
- ⑨ 大争闘 136~7 この働きは再臨の前に行われる。

最後のあがない、特別な清めの前に

型の儀式において至聖所における祭司の働きには調査審判の働きが含まれていた。

実体の天の至聖所の働きが 1844 年から始まった。調査審判と特別な清めの間にどんな関係があるのだろうか？

- ⑩ 大争闘下 136,137「そして、地上の聖所の型としての清めが、それを汚してきた罪を取り除くことによって成し遂げられたように、天の聖所の実際の清めも、そこに記録されている罪を取り除くことによって、すなわち消し去ることによって、成し遂げられねばならない。しかし、これ(罪の除去)を完成するためには、だれが罪の悔い改めとキリストを信じる信仰によって、あがないの恵みを受ける資格があるかを決定するために、記録の書の調査がなされねばならない。したがって、聖所の清めには、調査の働きすなわち審判の働きが含まれるのである。」

ここで明らかなことは、最後の聖所の清めは、さばきの後に来るということである。つまり、彼らの内にさばきの前に立ち得る完全を持ち合わせてはいないということである。

問題は、神の民の多くの者が、清められ、完全になるならば、さばきに合格して、神の印を受けることができると思っていることである。

調査審判

神のさばきにおいて、サタンは激しく神の民を譴責する。

大争闘下 216,217「イエスが、彼の恵みに浴する人々のために嘆願される一方において、サタンは、彼らを罪人として神の前に告訴する。大欺瞞者サタンは、彼らに疑惑を抱かせ、神に対する信頼を失わせ、神の愛から彼らを引き離し、神の律法を犯させようとしてきた。そして今度は、サタンは、彼らの生涯の記録を指摘し、品性の欠陥、贖い主のみ栄えを汚したところの、キリストに似ていない点、そして、彼が誘惑して彼らに犯させたすべての罪を指摘して、これらのことのゆえに彼らは自分の臣下であると主張するのである。

イエスは、彼らの罪の弁解はなさないが、彼らの悔い改めと信仰を示して、彼らの許しを主張なさり、天父と天使たちの前で、ご自分の傷ついた両手をあげ、わたしは彼らの名を知っている、わたしは彼らを、わたしのたなごころに彫り刻んだ、と言われるのである。

『神の受けいられるいけにえは砕けた魂です。神よ、あなたは砕けた悔いた心をかろしめられません』(詩篇 51:17)。そして、ご自分の民を訴える者にむかって、『サタンよ主はあなたを責めるのだ。すなわちエルサレムを選んだ主はあなたを責めるのだ。これは火の中から取り出した燃えさしではないか』と宣言される(ゼカリヤ 3:2)。」

イエスをご自分の民のために弁護士としてお立ちになるとき、彼らの聖化(どれほど清められたか)、あるいは彼らが完全になったことを提示されるだろうか？彼らの悔い改めと信仰を示して彼らの許し

を主張なさるのである。民は弁護士のあわれみと慈しみにすぎただけである。

これは型の儀式においても教えられた。イスラエルの民は、日毎の聖化で受けた自分たちの義を提示しただろうか。「私たちは日ごとに忠実に準備をしてきました、ついては何がいただけますか。おかげさまであなたの恵みによって勝利し清められました」と言うであろうか。断じてそういう態度ではない。

かつてなかったほどの断食と祈り、へりくだりと心の深い探索をもってさばきの座に臨むのである。『魂を悩まさない者は断たれてしまう』のである（レビ記 23:29）。

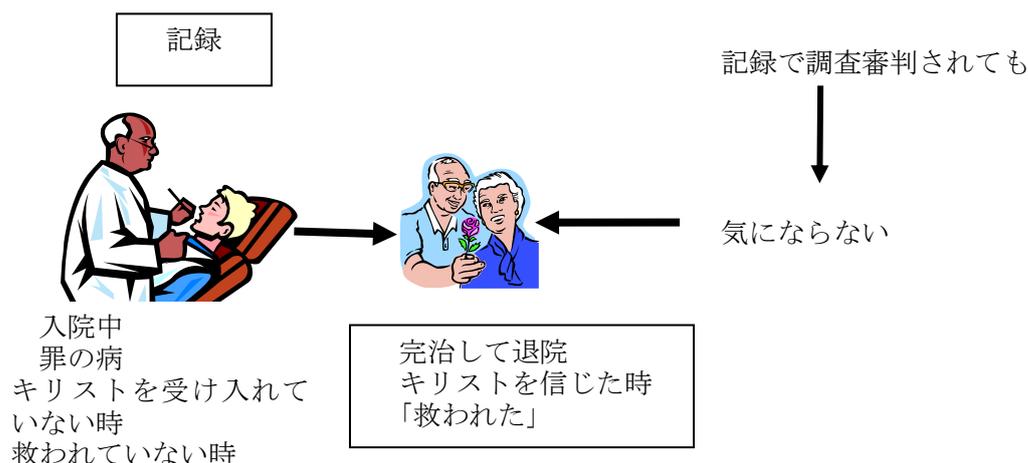
ヨエル 2:15-17「シオンでラッパを吹きならせ。断食を聖別し、聖会を召集し、民を集め、会衆を聖別し、老人たちを集め、幼な子、乳のみ子を集め、花婿をその家から呼びだし、花嫁をそのへやから呼びだせ、主に仕える祭司たちは、廊と祭壇との間で泣いて言え...。」

初代文集 437「いくらかの人々が強い信仰と苦悩の叫びをもって神に懇願していた。彼らの顔色は青白く、深い苦悩が刻まれ、内なる戦いを表していた。確固たる大いなる熱意が彼らの表情に表されたが、一方顔からは大粒の汗がしたたり落ちた。...わたしが見ているとある者が苦悩と懇願の働きに参加せず、彼らは無関心で不注意のようであった。...神のみ使いたちは彼らから離れていった〔自らの魂を悩まさない者たちは断たれるであろう〕。』

大争闘下 224「われわれは、今、大いなる贖罪の日に生存している。型としての儀式においては、大祭司がイスラエルのために贖罪をなしている間、すべての者は、主の前に罪を悔い改め、心を低くすることによって、魂を悩まさなければならなかった。もしそうしなければ、彼らは、民の中から絶たれるのであった。それと同様に、自分たちの名がいのちの書にとどめられることを願うものはみな、今、残り少ない恩恵期間のうちに、罪を悲しみ、真に悔い改めて、神の前に身を悩まさなければならない。われわれは、心を深く忠実に探らなければならない。多くの自称キリスト者がいっている軽薄な精神は、捨て去らねばならない。われわれを打ち負かそうとする悪癖に勝利しようとする者は、みな、はげしく戦わなければならない。準備は、一人一人がしなければならない。』

ところが今日、霊的イスラエル、セブンスデー・アドベンチストは至聖所のイエスを見失って、バビロン、諸教会から救いの確証について攻撃されるので、キリストの再臨を迎える特別な備え、特別なあがない、特別な清めの働きから目をそらして一般キリスト教会の考えに同調する傾向がある。「一人はなれてすむ民」と言われるのを恐れているのだろう。

S先生著、2001年3期、安息日学校聖書研究ガイド、プラス、62ページの考え方が教会を風靡している。つまり、すでにさばきは救われた者を監査するにすぎない。すでにパスポートもチケットも持っている者にとっては安心である。さばきは救われるかどうかを決定するものではない。運命を決定するものではない。キリストを受け入れた時点で完治した患者が病院から退院するのと同じだ。病院の記録は完治した者には何の関係もない。という考えはセブンスデー・アドベンチストの調査審判、最後のあがない、特別な清めの思想とは相容れないものである。一般キリスト教会に喜んで受け入れられる思想である。



上の図を見ていただきたい。クリスチャンになるとき、神の慈愛に引かれて悔い改めと信仰によってキリストのもとに来る。この最初の経験で多くの者が神の方法に従っていないことがある。

大争闘下 196「罪についての真の自覚もなく、悔い改めの必要も感じない。自分たちが神の律法の違反者であるという失われた状態を悟らず、キリストの贖罪の血の必要を自覚しないのである。心の根本的変化も生活の改変もなしに、救いの希望を受け入れる。このような表面的改心が広く行なわれていて、キリストと結合したことの多い多くの者が教会に加えられているのである。」

RH, December 22, 1885「キリストがすべてをしてくださった、個人的努力は不必要であるとする非常に世俗的な心を喜ばせる安楽な立場は、不信仰の証拠である。しかし聖書は、我々に恐れおののいて自分自身の救いを達成するようと言っている。自己満足は決して我々を救わないであろう。キリストが功績としてすべて必要なことをされたから、条件を満たすことは何もないと思う人たちは、彼ら自らの魂をだましているのである。我々はほんとうに世に対して光の通路となっているであろうか。品性の完成を求めることはどんなに重要であろう。キリストが言われた。『わたしは自分自身を聖別します。彼らも真理によって同じように聖別されるためです』と。」

キリストに近づけば近づくほど悔い改めと信仰は深くなっていく。罪の自覚も深くなっていく。「救われた」という自己過信ではなく、キリスト・イエスを救う為に来られた、自分は罪人の頭であるという意識を深めていく。信仰でイエスの功績を捉える人は悔い改めも深まっていく。完全に清められる約束を信じて目標をめざす。

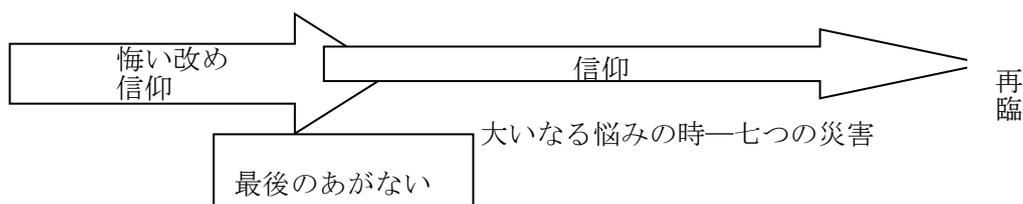
さばきの時はどうだろう？もう完治した、罪から完全に解放された、聖化の歩みで完全になったという思いでさばきに臨むだろうか。断じてそうではない。かえってキリストの無限の純潔を眺めるので、彼らの罪深さ、無価値さの意識はクライマックスに達し、絶望するばかりである。唯一の望みをキリストのあわれみにおいて、信仰によってキリストの功績にのみ頼るのである。

さばきの時も悔い改めと信仰を持ってキリストのもとに来なければ、あがないの日に「断たれてしまう」のである。

マタイ 7:22、23 「その日には、多くの者が、わたしにむかって『主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、

あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。そのとき、わたしは彼らにはっきり、こう言おう、『あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ、行ってしまえ』。』

● 神の祝福にあずかる方程式は、クリスチャンの初めも途中も終わりも同じである！外庭の祝福も、聖所の祝福も、至聖所の祝福も「悔い改めと信仰」「すみません」と「ありがとうございます」で頂くものである。神とキリストからの恵みは悔い改めと信仰を働かす以前から罪人に働いていたものである。クリスチャンになってから更なる恵みにあずかるのにも悔い改めと信仰なのである。至聖所の最後のあがないまで悔い改めと信仰はドッキングしている。最後のあがないの働きが終わると悔い改めと信仰はドッキングが解かれて、信仰だけが神の国に至るまで我々を運んでくれる。



国指下 193-194「ヨシュアとみ使いに関するゼカリヤの幻は、贖罪の大いなる日の、最後の場面における神の民の経験に、特別に当てはまる。その時、残りの教会は大きな試練と苦悩に陥る。神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持っているものに対して、龍とその軍勢は激しい怒りを発する。...神のあわれみだけが、彼らの唯一の希望である。祈りが彼らの唯一の防御である。ヨシュアがみ使いの前で嘆願したように、残りの教会は、心へりくだり揺るがぬ信仰をいだいて、彼らの助け主イエスによって、赦しと救出とを嘆願されるのである。彼らは自分たちの生活の罪深さを、十分認めている。彼らは自分たちの弱さと無価値さを知っている。そして、今にも絶望するばかりである。

誘惑者サタンは、ヨシュアのそばに立ったように、彼らのそばに立って告発する。彼は、彼らの汚れた衣、彼らの品性の欠陥を指摘する。彼は、彼らの弱さと愚かさ、忘恩と罪、彼らがキリストに似ておらず、贖い主の栄えを汚したことを示す。彼は、彼らの状態は絶望的で、彼らの罪のしみは洗い去ることができないと思わせて、恐怖に陥れようとする。彼は彼らの信仰を失わせて、彼の誘惑に屈服させ、神への忠誠から引き離そうと望むのである」。

しかし、神の民の「悔い改めと信仰」は神の恵みを絶対手放さないほど成長している。それは先の雨の聖霊の働きである。

最後のあがない＝特別なあがない＝特別な清め

国指下 196「神の民が神の前で心を悩まし、心が純潔になることを嘆願するとき、『彼の汚れた衣を脱がせなさい』という命令が出される。そして、『見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう』という励ましの言葉が語られる。(ゼカリヤ 3:4) キリストの義というしみのない衣が、試練と誘惑に耐えた忠実な神の民に着せられる。さげすまれた残りの民は栄光の衣を着せられ、世俗の腐敗に二度と汚されることはないのである。彼らの名は小羊の命の書に書き留められて、各時代の忠実な者の中に加えられるのである。彼らは欺瞞者の策略に抵抗した。彼らは龍がほえても忠誠を失わなかった。今や彼

らは誘惑者の計略から、永遠に安全な者となった。

...サタンが告発をしていたとき、目には見えないが、聖天使たちがあちこち行きめぐって、忠実な人々に生ける神の印をおしていた。この人々は、その額に父なる神の名を記されて、小羊と共にシオンの山に立つのである。彼らはみ座の前で新しい歌を歌うが、それは地上から贖われた 144,000 人のほかは、誰も学ぶことができない。」

「汚れた衣」とは何か？

- ① 品性の不完全さ=罪の記録
- ② 罪深さ=罪性

この時点で彼らは罪を犯してはいない。罪に勝利している（大争闘下 216）彼らは罪を捨て去り謙遜と悔恨の念をもって彼らの弁護士を求めた。

【ディスカッション】

ゼカリヤ 3 章では、汚れた衣=不完全な品性を着てさばきに出るのに、マタイ 22 章では礼服=完全な義の衣を着てさばきに来る。矛盾しないか。説明せよ。

調査審判の良きおとずれ

ダニエル 7 章にさばきは福音であることがどのように描写されているか？「聖徒のために審判をおこなった」（22 節、27 節）のであれば、さばきは福音であるはずだ。「彼の主権」が永久に奪われるからだ。その主権とは何か？小さい角の主権であり、その背後にあるサタンの主権でもある。神の民の心から永久に自我(サタンの精神)を取り除くことである。

さばきは:

- ① 神の民を調査するだけではない。
- ② 最後のあがない、罪の除去、永久に神の民をもろもろの罪から切り離すことである。

レビ 16:30「この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである」。

※ [新共同訳] では「あなたたちのすべての罪責が主の御前に清められるからである。」罪責は日毎の奉仕で清められるからからである」となっている。新共同訳ではセブンスデー・アドベンチストの「最後のあがない」の教理を説く事ができない。

イザヤ 43:25「わたしこそ、わたし自身のために、あなたがたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない」。

エレミヤ 50:20「主は言われる、その日その時には、イスラエルのとがを探しても見当らず、ユダの罪を探してもない。それは、わたしが残しておく人々を、ゆるすからである」。

人あ上 422「大いなる最後の報いの日に...このとき、真に悔い改めたすべての者の罪は、キリストの贖罪の血によって、天の書物から消される。こうして、聖所から罪の記録が除かれ、清められるのである。...もはや思い出すことも心に浮ぶこともなくなるように...。」

大争闘下 393「彼らの罪は、前もってさばかれて、消し去られている。彼らは罪を思い出すことができない。」

これこそさばきの良きおとずれではないだろうか。黙示録 14:6「さばきの時は来た」という使命は

永遠の福音といわれている。永遠に罪に終わりをもたらす働きだから、さばきは福音なのである。神はあわれみ深いから罪の除去はなされなくても、さばきを不安がる必要はないというのは真の福音ではない。

後の雨

日毎の奉仕で罪を告白したら罪責は取り除かれる。告白されない罪、克服しない罪のままでさばきに臨めない。年毎の奉仕であがないの日に魂の至聖所が全く清められる。罪の傷あと、記録、そしてサタンの力から清められるのである。罪なき完全な者とされるのである。

我々の魂の奥殿=至聖所もはじめて聖霊で満たされて神の栄光をあらわす生ける神の宮が完成される。その時**黙示録 18:1 が成就する**。「この後、わたしは、もうひとりの御使が、大いなる権威を持って、天から降りて来るのを見た。地は彼の栄光によって明るくされた。」

1. 罪の除去と後の雨

罪の除去は、調査審判の時までは起こらないことは前にも学んだ（大争闘下 215-220）。

大争闘下 218)「彼らが調査されるその審判が終わるまでは、彼らの罪はぬぐい去られることはできない」。

では、罪の除去と後の雨との関係はどうであろうか？

使徒 3:19,20「だから、（調査審判において）自分の**罪をぬぐい去っていただくために**、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、**主のみ前から慰めのとき**がきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを、神がつかわして下さるためである。」（各時代の争闘の1888年版には、かっこ内の句が挿入されている）

レビュー・アンド・ヘラルド 1884年4月29日「...慰めの時が来る時、彼の罪は除去され、その名は生命の書にとどめおかれた」。

レビュー・アンド・ヘラルド 1884年10月21日「...罪は告白され、さばきに先立ち行くべきである。それは慰めの時が来る時、それらの罪が除去されるためである。」

使徒行伝 3:19,20 の順序は次のようになる：

- ① 悔い改め—ヨエルはあがないの日の特別な深い悔い改めを訴えている(ヨエル 2:12-17)。
- ② 罪の除去—さばきの時になされる。
- ③ 後の雨で満たす。
- ④ キリストの再臨

②③は同時に聖霊が信者の宮でなされる。聖霊が宮に満ちるためには罪がことごとく除去されなければならない。

キリストは天の聖所で奉仕しておられる。一方、**み霊は魂の宮で奉仕**しておられ、その奉仕のみ業につながる個々人の魂にキリストのみ業の恵みを適用しておられるのである。こうしてキリストが天の書より罪の記録を取り除けば、み霊は魂の宮において、それに相応するみ業をなさるのである。

3 希望 156,157 「みたまは人を生れかわらせる働きをするものとして与えられるのであって、これがなければ、キリストの犠牲は何の役にもたたなかったであろう。世のあがない主によって達成されたことに効果を与えるのはみたまである。心が清くされるのはみたまによってである。」

キリストの血が我々を清めることを可能ならしめるのは何か？ 御霊である。

希望上 109, 110 「『わたしは悔い改めのために、水でおまえたちにバプテスマを授けている。しかし、わたしのあとから来る人はわたしよりも力のある方で、わたしはそのくつを脱がせてあげる値打ちもない。この方は聖霊と火によっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう』とヨハネは言った(マタイ 3:11)。預言者イザヤは、神が『審判の霊と滅亡の霊とをもって』ご自分の民を不義から清められると宣言した。(イザ 4:4) …罪にとって、それがどこに見いだされようと『わたしたちの神は、実に焼きつくす火である』(ヘブ 12:29)。神のみたまは、その力に服するすべての者のうちにあつて、罪を焼きつくす。」

イエスのもとに来るとき、罪責から我々の心を清めるのは何か？ 聖霊がイエスの血を我々の生活に適応し、そして罪から清めるのである！

聖所に示されているクリスチャン経験のステップを考えてみよう。

- ① 外庭の門—信仰の門(使徒 14:27)、信仰と悔い改めは切り離すことができない。悔い改めに導くのは聖霊がイエスの十字架に表された慈愛を見させることによってである。(ロマ 2:4)
- ② 祭壇—キリストと共に死ぬ、自我を祭壇で十字架につける。聖霊がする。自分で自分を祭壇、十字架につけることはできない。(キ実 139)
- ③ 洗盤—再生するのは？ キリストの復活を我々の生活に適応させるのは？ 聖霊
- ④ 香壇—イエスのいさおし(功績)、義を我々の中に適応させるのは？ 聖霊
- ⑤ パンの机—イエスのみ言を我々の心の中に効果あらしめるものは？ 聖霊
真理を理解させるのは？ 3希望 156, 157 聖霊
- ⑥ 燭台—「わたしは世の光である」と言われたイエスの光、品性を輝かすのは？ 聖霊
良い行いとなって、世の人々に感化を与えさせるのは？ 聖霊

キリストが天の聖所で我々のためにして下さるすべての事を我々に適応するのは聖霊である！

では、天でなされる罪の除去は我々の心にどのように適用されるだろうか？

神の民が聖所のまわりに集まって魂を悩ます。知っている罪を全部告白して罪責から清められている。罪に勝利してきた。しかし、自分たちの弱さと欠点記録を見せられる。神の民は完全に十分に罪深さと無価値さを意識する。今にも絶望するばかりである。誰がそうさせるのか？ 聖霊の働きである。サタンが彼らを訴える。イエスは彼らのために“汚れた衣を脱がせなさい”と言われて新しい輝かしい衣に変えられる。二度とこの世の腐敗に汚されない者とされる。「何がこのような大変化をもたらすのか？ 後の雨である。(初文 440)

2. 魂の宮の完全な回復

- ① 罪の除去ばかりでなく、② 後の雨は回復するのである。(5T537)

キ実 242「贖罪の目的は、罪を除去することだけでなく、罪の退化力のために失われた霊的たまものを人間に回復することにある。」

霊的賜物、霊的な能力である。肉体的能力ではない。

ヨエル 2:25 「わたしがあなたがたに送った大軍、すなわち群がるいなご、とびいなご、滅ぼすいなご、かみ食らういなごの食った年をわたしはあなたがたに償う。」

イザヤ 4:2-5「そして主が審判の霊と滅亡の霊（焼き尽くす霊、欽定訳）とをもって、シオンの娘らの汚れを洗い、エルサレムの血をその中から除き去られるとき、シオンに残る者、エルサレムにとどまる者、すべてエルサレムにあって、生命の書にしるされた者は聖なる者となえられる。その時、主はシオンの山のすべての場所と、そのもろもろの集会との上に、昼は雲をつくり、夜は煙と燃える火の輝きとをつくられる。これはすべての栄光の上にある天蓋であり、あずまやであって、昼は暑さをふせぐ陰となり、また暴風と雨を避けて隠れる所となる。」

TM506「季節の終わり近くに降る後の雨は穀物を熟させ、刈り入れに備える。穀物が熟すること、魂の中に神の恵みのみ業が完結することを表している。…聖霊のみ力によって神の道徳的かたちが品性に完成されるのである。われわれは全くキリストに似たものに変えられる。…先の雨がその働きをしないならば、後の雨は完全の実を成熟させることはできないのである。」

穀物を熟させるということはどういう意味だろうか？ 品性の完成をもたらすのである。

質問:完全な品性に到達した者に後の雨が降るのか？ 完全な品性にするために後の雨が降るのか？

3. 後の雨と印する働き

キリストを受け入れるなら、聖化されるのも、品性の仕上げも聖霊の働きである。聖所の奉仕は、日毎の奉仕と年毎の奉仕に分けられ、それは先の雨、後の雨に分けることができる。

エペソ 1:13「あなたがたもまた、キリストにあって、真理の言葉、すなわち、あなたがたの救の福音を聞き、また、彼を信じた結果、約束された聖霊の証印をおされたのである。」

エペソ 4:30「神の聖霊を悲しませてはいけない。あなたがたは、あがないの日のために、聖霊の証印を受けたのである。」

6BC1118(スタディーバイブル新 426)「我々はキリストにある男女の背丈にまで到達するために、全力をつくしているであろうか。我々はキリストの満ち満ちた徳の高さを求め、我々の前に置かれた目標、すなわちキリストの品性の完全を目指して前進しているだろうか。主の民がこの目標に到達するとき、彼らは額に印を押されるであろう。彼らは御霊に満たされて、キリストにあって全き者となる。すると、記録天使は『すべては終わった』と宣言する。」

初代文集 149「生ける神の印を受け、悩みの時に保護される人々は、イエスのみ像を完全に反映していなければならない。」

6BC 1118(スタディーバイブル新 428)「キリストに対する信仰によって神の戒めのすべてに従うものだけが、アダムが罪を犯す前に持っていた罪なき状態に到達するであろう。彼らは、神の律法のすべてに従うことによって、キリストに対する愛を証するのである。」

要約:

品性の完成＝②生ける神の印＝③聖霊の満たし＝④罪なき状態

これらの祝福は調査審判の祝福である。

恩恵期間終了の前に神の民はこの経験を持つ（大争闘下 385-386 ; 396-397）

後の雨／神の印はどんなことをするか？その目的。

1) 最後の大いなる叫びの伝道

7BC984、(スタディバイブル 595)「私は力ある天使が天から下ってきて、この世界のための働きを終わらせるために、第三天使と結合する聖霊のそそぎが行われる時(will)について語るべき特定された明確な時は示されていない。」

初代文集 439—440「天使は『見なさい』と言った。すると、わたしは前に大いにふるわれるのを見たその一団の人々に注目した。わたしは、前に涙を流し、苦悶しているのを見たその人々を見せられた。彼らの回りの守護の天使は二倍に増やされた。そして人々は、頭から足まで、武具をまとっていた。彼らは、兵卒の隊のように、規律正しく動いた。

彼らの顔は、彼らの耐えてきた激しい争闘と経てきた苦悶とを表していた。しかし、彼らの容貌は、激しい内的苦悶のあとがあったとはいえ、今は、天の光と栄光に輝いていた。彼らは、勝利を得た。

わたしは、武具をまとった人々が力強く真理を語るのを聞いた。それは効果的であった。多くの人々が縛られていた。夫に縛られていた妻もあれば、親に縛られていた子供もあった。真理を聞くことを妨害されていた心の正しい人々は、今、熱心に真理を自分たちのものにした。親族を恐れる気持ちは全くなかった。そして、真理だけが彼らの前で高められたのである。彼らは、飢え渇くように真理を求めていた。真理は、生命よりも愛すべく尊いものであった。わたしは、何がこのような大きな変化をもたらしたのかをたずねた。

『それは後の雨、主のみ前からの慰め、第三天使の大いなる叫びである』と天使は言った。大いなる力が、これらの選ばれた人々と共にあった。天使は、『見なさい』と言った。わたしの注意は、悪人たち、すなわち信じない者たちに向けられた。彼らは騒ぎ立っていた。神の民の熱心と力とが彼らを刺激し怒らせた。どこを向いても、混乱、また混乱であった。』

イエスが天父の栄光を表したのは、聖霊に満たされていたからである。神の民が栄光で充たされてイエスのみ像を完全に反映するのは、聖霊—後の雨に満たされるからである。大いなる叫びは後の雨による(初代文集 440)。それが全地を照らす栄光なのである。

「第三天使の使命も、このようにして宣布される。それが非常な力で伝えられる時が来るならば、主は謙遜な器を通して働かれ、主の奉仕に献身した人々の心を導かれる。働き人は、学歴ではなくて、聖霊を注がれることによって資格を与えられる。信仰と祈りの人は、聖なる熱意に燃えて出て行き、神から与えられる言葉を宣言せざるをえなくなる。バビロンの罪は暴露される。教会の法令を政権によって強制することの恐るべき結果、心霊術の侵入、法王権のひそかではあるが急速な発展などが、みな暴露される。」大争闘下 376

2) 大いなる悩みの時に備える

この経験は、生きて主を迎える者たちの経験である。死んだ義人たちは後の雨を受けない。後の雨は、悩みの時の備えのためであり、生きて主を迎える備えをさせるためのものだからである。後の雨は、さばきや日曜休業令や大いなる叫びの前に備えさせるものではない。

初代文集 173「その時に、『後の雨』すなわち、主のみ前から慰めの時が来て、第三天使の大きな声に力をそえる。そして、最後の災害が下る時に、聖徒たちが立つことができるように準備を与える。」

初代文集 448「この天使の働き（黙 18:1）は、最後の大きい働きにおいて第三天使の使命が大きい
なる叫びとなって盛り上がるちょうどその時に始められる。神の民はこのようにして、ま
もなく遭わねばならない誘惑の時に立つ準備ができるのである。」大争闘下 385 参照。

初代文集 451「神の民には天来の力がやどり、彼らは働きを完成して、目の前の試練の時に対する備
えができていた。彼らは、後の雨、すなわち神のみ前より来る慰めを受け、生ける証が復
活していた。」 ※目の前の試練とは、大きい悩みの時のこと。

初代文集 149「彼らは、聖なる神の前に生きるのに適した者とするために、...慰め(後の雨)を受ける
ことができなかつた。」

7BC 984(スタディバイブル(新) 594「第三天使の使命が大きな叫びへと高まり、大きな力と栄光が
最後の働きに伴うにつれて、忠実な民はその栄光に預かるであろう。それが彼らを生き返ら
せ、悩みの時を通過させるために力を与える後の雨である。」

3) キリストの再臨に備える (使徒 3:19,20)

TM506、黙 14:14「...彼らは後の雨を受けて、そして昇天に適する者となった (用意ができた)。」
(1T187 参照)

TM506「季節の終わり近くに降る後の雨は、穀物を熟させ、刈り入れに備える (再臨のこと)。」
「後の雨が...教会を人の子の来臨に備えるのである。」

神の民の盲点:

- ① キリストとの関係が確立されておれば、調査審判は単なる監査で何事も無い。
- ② 完全な品性になってからさばきに合格する。
- ③ 完全に罪のない品性は再臨まで不可能。

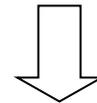
さばきにおいて神の民が経験する祝福を表にまとめてみよう:

右側の列は、調査審判において、神の民は確かにすばらしい、劇的な経験をする。

日毎の経験(聖所の経験)	最後のあがない(至聖所のあがない)
清いと同時に清くない	永遠に純潔
あがないが始まった、しかし完全なるあがないではない	完全なあがない
義認の始まり	完全にして十分な義認 (大争闘 2 1 6) 義認で品性を完成 (青年 1 5)
律法の宣告から完全には解放されていない (人あ上 420)	完全に解放
告白した罪のとがめはないが、まだ罪性と記録は残る	永久になし
人性と神性の結合の始まり	

<p>礼服—キリストの義の衣</p> <p>聖霊の内住—始まる</p> <p>聖霊の証印—エペソ 1:13, 3:30</p> <p>震いが始まっている</p> <p>悔い改めの始まり</p> <p>新しい契約の始まり</p> <p>先天的、後天的性癖、悪への傾向が品性から切り離される</p> <p>罪の力に支配されない</p> <p>イエスのみ像を反映</p>	<p>完成—婚姻（初文 4 5 2）</p> <p>汚れた衣を脱ぐ(ゼカ 3 章)国指下 196(p40 に引用) 二度と世俗の腐敗に汚されない。</p> <p>聖霊の充満</p> <p>生ける神の印（6 B C 9 7 6）</p> <p>最終的な目に見える震い</p> <p>悔い改めの終わり（2 T 5 0 5）</p> <p>新しい契約の成就（大争闘 2 1 7）</p> <p>永久に悪への傾向を持たない</p> <p>永久に罪の力に支配されない、安全。国指下 196</p> <p>イエスのみ像を完全に反映</p>
--	---

TM18 「キリストの義が賦与される教会は、主の憐れみと、愛と、恵みが完全に最終的に現わされるべき倉庫である。…豊かな、完全にして十分な主の聖霊の賜物が、陰府の力も打ち勝つことのできない力となって、教会を包囲する火の壁のようになるであろう。」



最後のあがないの結果:栄光の姿の教会

マラキ 3:4、エペソ 5:27、雅歌 6:10、黙 19:7,8

大きな変化！初代 440
大下 381-383
大いなる叫び 黙 18:1-5

罪の除去とは？ E・J・ワゴナー

「我々は、罪の除去がただ単に、黒板ふきで黒板をふくとか収支の勘定残高をするようなものであるという考えにはよくよく注意しなければならない。これは罪の除去ではない。初めて温度計を見た無知な者が温度を下げようと思ってそれをこわした。しかし、そのことが天気にとどれほどの影響を与えたであろうか？—ただ記録を消し去ることが罪人に何の影響も与えないと同じである。帳簿の頁を破ったところで、あるいは記録されている帳簿を焼き払ったところで罪は消し去られるものではない。罪を帳簿から削除したところで罪はなくなる。それは聖書を焼き払ったところで神の言葉が亡くならないように。見つけられるだけの聖書を全部焼き払ったことがあった。しかし、神の言葉—真理—は同じように残った。真理は神ご自身、その生命だから。」

「モーセが石の板を壊したとき、律法は以前と変わらず残っていた。そのように我々のすべての罪が、それがたと神のみ手によって記された罪が消されたとしても、それは残っている。なぜなら、それは我々の内にあるから。我々の罪の記録が岩に彫り刻まれていたとしても、そしてその岩を粉々にしたとしても、なおそれは我々の罪を除去できない。」

「罪の除去とは人間の性質、その性質から罪を消し去ることである。」

「罪を消すというのは、それを我々の性質から除去することによって、我々が再び、罪を知らなくなる事なのである。『み前に近づいて来る者たちを』—キリストの血によって、実際に清められ—『もはや罪の自覚がなくなり』『全うするのである』。なぜなら罪の道が彼らから、なくなったからである。彼らの不義は探しても見当たらない。それは永遠に彼らから離れ去り、彼らの新しい性質にとってそれは異

質のものとなり、自分たちがかつてある罪を犯した事実を覚えてはいるかもしれないが、罪自体を忘れる一つまり二度とそんなものを犯そうとは思わなくなっているのである。これが真の聖所におけるキリストの働きである。すなわち、それは人手によらず、神のお考えで存在した聖所である。」”The Blotting Out of Sin” RH, Sep.30,1902,p.8

天のランドリー

花婿イエスは、花嫁である教会と最後のあがない、**final at-one-ment**、即ち永久に一つになりたいために待っておられる。天のランドリーはまだ開いている。まもなく閉店するのである。汚れた衣を天のランドリーに出して真っ白く洗ってもらう時である。

エペソ 5:26「キリストがそうなさったのは、**水で洗う**ことにより、言葉によって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、また、しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるためである。」

黙示録 7:14 「わたしは彼に答えた、『わたしの主よ、それはあなたをご存じです』。すると、彼はわたしに言った、『彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって、その**衣を小羊の血で洗い、それを白くした**のである。』」

5BC210「今は、品性という我々の衣を**小羊の血で洗う、洗濯とアイロンがけの時**である。ヨハネは『見よ、世の罪を取り除く神の小羊』と言っている。...我々は、その小羊に罪を取り除いていただくのではないか。」

我々の大祭司、また小羊は何でご自分の花嫁の衣=品性を洗うのだろうか？

十字架のイエスのお体から水と血が流れ出た。水、すなわちみ言葉と、世の罪をとりのぞく神の小羊の血のみがどんなに汚れた罪でも、ご自身の衣と同じくらい真っ白に洗ってくださるのだ。

実物教訓 331「イエスをながめることによって、いっそう明らかに神を見ることができるようになり、わたしたちは、ながめることによって変えられる。同胞に善を行ない、彼らを愛することは、わたしたちにとっては自然に行なう本能となる。そして、**神の品性と全く同じ品性 counterpart**」を自分たちの中に形成する。」

エペソ 5:26「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるためである。」

実物教訓 47「**キリストの品性が完全にキリストの民の中に再現**されたときに、彼らをご自分のところに迎えるために、主はこられるのである。」

IV. 聖所の清めと健康改革

1. 我々は生ける神の宮である。

2 コリント 6:16 「神の宮と偶像となんの一致があるか。わたしたちは、**生ける神の宮**である。神がこう仰せになっている、『わたしは**彼らの間に住み**、かつ出入りをするであろう。そして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう。』」

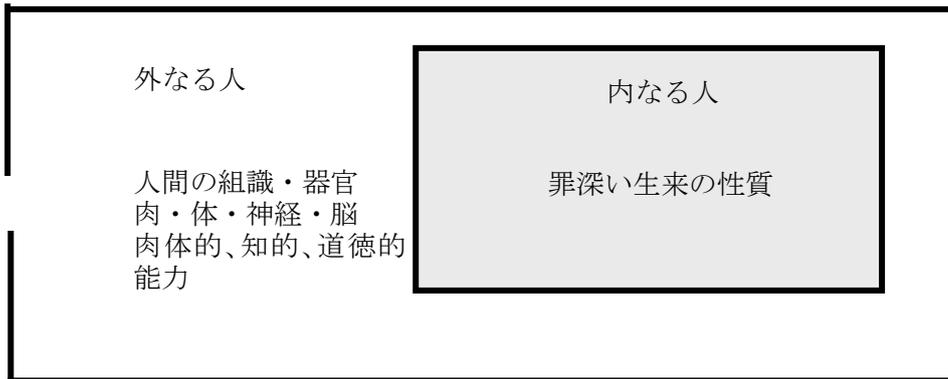
1 コリント 3:16,17 「あなたがたは**神の宮**であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、

神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである。」

1 コリント 6:19, 20 「あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい。」

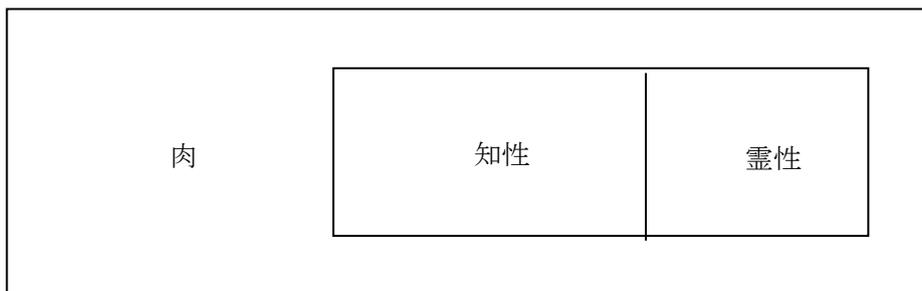
2. 人間は二つの部分から成っている。

外なる人と内なる人(1 コリント 4:16)と表現するときがあるし、肉と霊(2 コリント 7:1)と表現するときもある。現代的には肉体と精神と表現する。



「だから、わたしたちは落胆しない。たといわたしたちの**外なる人**は滅びても、**内なる人**は日ごとに新しくされていく」コリント第二の手紙 4:16
「わたしたちは、このような約束を与えられているのだから、**肉と霊**とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くならうではないか」コリント第二の手紙 7:1

また、ある場合は、三つの部分に分けることがある。



1 テサロニケ 5:23 「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全くきよめて下さるように。また、あなたがたの**霊と心とからだ**とを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのない者にして下さるように。」

神は二つの部分、あるいは三つの部分にご自分の律法をご自分の手で記された。

食事と食物 11 「神は道徳律の創設者であると同時に、**肉体の法則**の創設者でもある。神は、人間に託されたすべての神経とすべての筋肉とすべての機能の上に、**神の律法をご自分の手でお書きになった。**」

3. 肉体の法則を犯すことは罪である。

実物教訓 323 「**肉体の法則に反することは道徳律に反することである。**神は、道徳律の創設者であ

ると同時に、肉体の法則の創設者でもある。神は、人間にお任せになったすべての神経とすべての筋肉とすべての機能の上に、神の律法をご自分の手でお書きになった。であるから、わたしたちの体の組織のどの部分の悪用であっても、それは、その律法の違反になるのである。

食事と食物 12「我々の肉体の法則を犯すことは、十戒を破るのと全く同じ罪であって、いずれも律法違反である。また肉体の内にある神の律法を犯す人々は、シナイ山から語られた神の律法を犯し易くする。」

4. 聖所の清めは、肉体の汚れから清められることをも含んでいる。

食事と食物 20「祝福に満ちた望み、すなわち、わたしたちをすべての不法からあがない出して、良いわざに熱心な選びの民をご自分のものとして聖別するためにご自身をささげられた大いなる神、わたしたちの救い主イエス・キリストの栄光の出現を待ち望む」人々が、救い主の近い出現に対して信仰のない現代の宗教家たちにおくれを取ってよいであろうか。死を見ないで天に移されるために、神がご自身のものとして聖別しておられる特別の民が、良い業をするのに、他の人々に遅れてはならないのである。肉体と精神のすべての汚れから自らを清め、神を畏れて、完全な聖さに到達しようと努力する点で、彼らは他のどんな階級の人々よりもはるかに優れていなければならない。それは、彼らの公言することが他の人々の場合よりも程度が高いのに比例していなければならない。

食事と食物 29「神はご自分の民が、肉と霊の一切の汚れから自分を清め、神を恐れて全く清くなるように求めておられる。この働きに無関心であり、これから逃れ、自分でするように神が要求しておられることを、神にしてもらおうと待っている者は、神の御旨を実行しようとしてきた謙遜な人々が、エホバの怒りの日に隠されるとき、自分の欠けていたことが分かるのである。神の民が、自分で何の努力もせず、聖霊が降って彼らの悪を除き誤りを正すのを待っているならば、また、それが肉と霊の汚れから彼らを清めて第三天使の大いなる叫びに加わるように準備するものと当てにしているならば、彼らは欠陥があったことを発見することを私は示された。神が命令されたこと、すなわち、肉と霊の一切の汚れから自分を清め、神を恐れて全く清くなる努力をして自ら準備した人々にのみ、聖霊、すなわち、神の力は降るのである。」

ダニエルの決心

ダニエル 1:8「ダニエルは王の食物と、王の飲む酒とをもって、自分を汚すまいと、心に思い定めたので、自分を汚させることのないように、宦官の長に求めた。

食事と食物 25「ダニエルのように自らを汚すことを拒む者は節制の習慣を報いとして受ける。」

食事と食物 24 「節制の問題を正しく理解するためには、聖書の立場から考えなければならない。バビロン王宮での預言者ダニエルとそのヘブルの友人たちの歴史が与えている例ほど、真の節制とこれに伴う祝福について、包括的で有力な例はどこにも発見できない。

神はいつも正しい者を尊ばれる。大征服者によって攻略されたすべての国々から、最も有望な青年たちがバビロンに集められたが、それらすべての中で、ヘブルの捕虜に匹敵する者はなかった。まっすぐな姿勢、弾力ある足どり、美しい容貌、曇りのない感覚、汚れない息など、すべてが良い習慣についての非常に多くの証であって、自然の法則に従順な者を自然が尊んでその人に与える高貴なしるしである。

ダニエルと彼の友人たちの歴史は、その後の全時代を通して青年たちの益となるよう聖書のページに記録されたのである。人の行ったことは、また他の人も成し得るのである。かの若きヘブルの青年たちが、大きな誘惑の中で堅く立ち、真の節制のために立派な証を立てたのであれば、今日の青年も同様な証を立てることができる。」

食事と食物 46,47「身体と精神をもって神の栄光を表すこと」「肉体と霊とをもって神の栄光を表わし」

EV696「キリストの来臨が遅れることは、神のみ旨ではなかった。神の民イスラエルが40年も荒野でさまようことを神は意図されなかった。神は彼らを直接カナンへの地に導かれるよう約束された。そしてそこで清い、健康な、幸福な民を打ち立てようとなさった。...このように長い間、罪と悲しみの世に我々をとどめたのは、神の民の間における不信仰と、世俗さ、不献身と争いのためであった。」（※3K）

9T112,113「健康改革の働きは、世の苦しみを減少させ、ご自分の教会を清める主の方法である。」

TM416「生命の息が速やかに教会にもどってくるかどうか確かめてみなさい。」

食事と食物 23「イスラエル人が受けた教えに従い、彼らの特権によって祝福を受けたならば、健康と繁栄の世界的な実物教訓となっていたはずである。もしも、彼らが一国民として神のご計画に従って生活したならば、他の国民を苦しめた病気から守られたのであって、他のどんな国民よりも優れた体力と知力を持ったはずであった。」

出エジプト 15:26、申命記 7:12、詩篇 103:3-5

国指下 314「選民であるイスラエルによって、神が世界のためになそうとご計画になったことを、神はついに今日の地上の教会によって達成なさるのである。」

CH575「もしセブンスデー・アドベンチストがその信じると告白することを実行するなら、もし彼らが誠実な健康改革者であるなら、彼らはこの世界と天使達と人々の前に見世物となるであろう。」

食事と食物 432「もし我が教会の信者たちが、この問題に関する光を無視するなら、霊肉ともに退化することによって確実な結果を刈り取るであろう。そして、これらの古い教会員の感化は、新しく信仰に入った人々に及ぶのである。悔い改めていない教会員や、一度は悔い改めたが背信してしまった教会員がいるために、主は現在多くの魂を真理に導くために働かれない。これらの清まっていない教会員は、新しい信者にどんな影響を及ぼすことだろう。彼らは、神から与えられ、神の民が伝えなければならない使命の力を無効にしないだろうか。」

食事と食物 434,435「健康の原則を教えるにあたって、改革の目的を念頭におきなさい。つまり、その目的は、身体と精神と魂に最高の発達を遂げさせることである。」

食事と食物 227「食欲の放縦によって生ずる災いを防ぐために、天父が健康改革の光を送ってくださったのは、愛によってであった。」

ミニストリー247「人は神の宮、神の栄光のあらわれる住み家とならなくてはならないとの知識が、わたしたちの体力を守り、またそれを発育させていくうえに最高の動機とならなければならない。創造主はおそるべく、くすしく人間の身体を造られており、わたしたちがそれを研究し、その必要なものを理解し、これを危害や汚辱から守るために自分の責任を果すように命じられている。」

V. キリストの模範

序論:

「神よ、あなたの道は聖所にある。」罪が処理され、再び神に帰る道＝方法が聖所に示されていることは学んだ。

イエスは「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。」と言われた。イエスは、その生涯と犠牲の死と仲保の働きによってどのように罪に勝利し、神に帰るかを示された。完全に墮落した人間を神は見捨てられない。人間をあがなうために神であられたお方、キリストが望みのない墮落した人性を回復なさるのである。

QD657「キリストは我々の墮落した人性をお取りになる。そのことによって「我々がどんなものになり得るかを示すためである」

ST7-30、1890「神性と人性が神秘的に結合し、人と神とがひとつになった。わたしたちが墮落した人類の希望を発見するのは、この結合の中においてである」

1. キリストはアダムが罪を犯して後の墮落した性質を取られた。

アダムの罪なき性質ではなかった。「現代の真理」に引用文を見よ。

MM181「彼はご自分の罪なき性質の上にわれわれの罪深い性質をおとりになった。それは試みられている者をいかにして助けるかをお知りになるためである。」

1 SM268「彼は人の性質をとられ、人類の弱さと退化とをおわれた。」

QD657「彼はご品性に一点のしみももっておられなかったがわたしたちの墮落した性質を自分の神性に結びつけるまでにへり下られた。」

レビュー・アンド・ヘラルド 1906年4月5日 英文「キリストは人間の性質をとられたかのごとくよそわれたのではなかった。彼は確かに人性をおとりになった。彼は現実に人間の性質をとられた。」

希望上 124「四千年間にわたって、人類は体力も知力も道德価値も低下していた。しかもキリストは退歩した人類の弱さを身につけられた。こうすることによってのみキリストは人類を墮落の一番深い底から救うことができになるのであった。」

希望上 125「だが救い主は、罪の負債ごと人性をおとりになった。彼は試みに負ける可能性のまま人間の性質をおとりになった。キリストが耐えられなかったことで、われわれの耐えねばならないことは何一つない。」

1 SM268(英文)「彼(キリスト)は人の性質をとられ、人類の弱さと退化とを負われた。」

希望上 35「アダムがエデンで罪を知らなかったときでさえ、神のみ子が人の性質をおとりになることは無限の屈辱に近かった。ところがイエスは、人類が四千年にわたる罪によって弱くなっていた時に人性をおとりになったのである。アダムのすべての子らと同じように、イエスは遺伝という大法則の作用の結果をお受けになった。そのような結果がどういうものであるかは、イエスのこの世の先祖たちの歴史に示されている。主は、われわれの苦悩と試みにあずかり、罪のない生活の模範をわれわれに示すために、このような遺伝をもってお

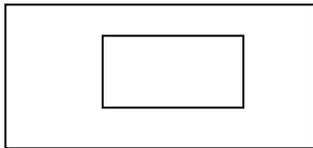
いでになったのである。」

QD651「彼は『人の罪深さではなく、性質』をとられることによって人類の頭の地位をとられた。」

● キリストの性質を理解するために、「性質」(Nature)という言葉の使い方を知る必要がある。

① 「性質」という言葉は全人を表現している場合とそうでない場合がある。

パウロは「外なる人」「内なる人」と分けている。「外なる人」は我々の肉体だけでなく、肉体的、知的、道徳的能力を含めた部分を性質という場合がある。「内なる人」は霊、心、魂、品性を指す。キリストが取られた性質という場合どのように使われているかを理解する必要がある。



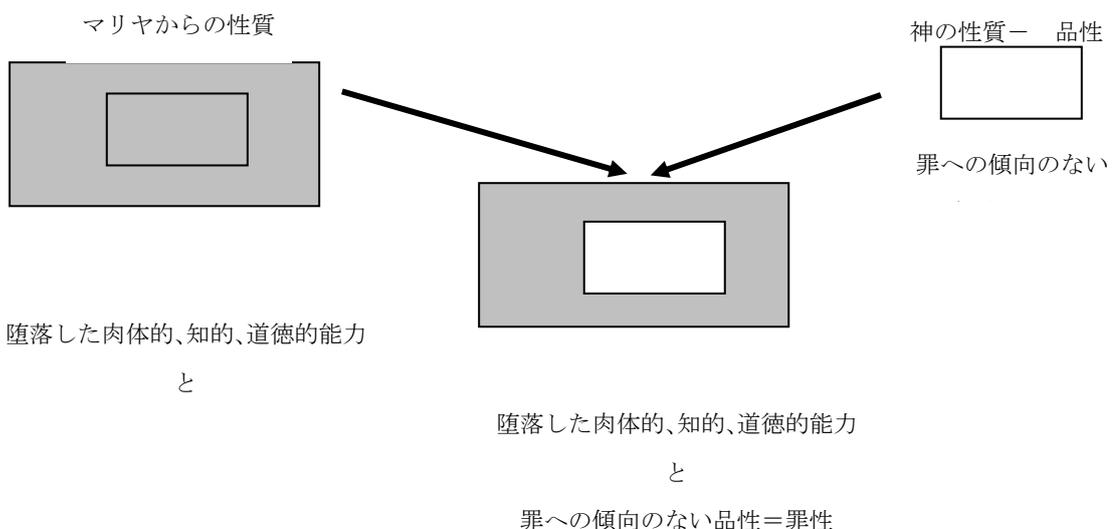
外なる人=からだ、肉体的、知的、道徳的能力

内なる人=霊、心、魂、品性

② 「霊」と訳されている言葉—“ruach”というヘブル語、“pneuma”というギリシャ語が「息」「性質」を意味したり、ある時には「聖霊」を意味することがある。前後関係によって使い分けなければならない。「肉」という場合も、外なる人だけでなく単に肉体を指す場合もあるし、「古き人」、生まれ変わらない全人を表わす場合もある。ロマ 6:6、ガラ 5:19-21、家教 131

③ 品性は思想+感情で構成されている (5 T 310)。それは「性質」とも言われている。(OHC 278)「罪への傾向=品性の欠点」が我々の性質である。(キ道 81、教育 21)我々は「一つの罪への傾向も保つ必要はない」のである。キリストは品性の罪性以外はすべて墮落した性質をとられた。すなわち肉体だけでなく、4千年も退歩した知的、道徳的能力を取られた。その品性に罪への傾向は相続されなかった。「神が与えられた知的、道徳的能力は品性を構成しない。それらはタラントである。」(4 T 606)

図表で表わしてみよう:



2. キリストのご品性

● 神性と人性の結合の結果:

では、我々とキリストはどこが違っていたのか？

キリストは一瞬たりとも罪、悪への傾向がなかった。罪＝罪性もなく、罪を犯すこともなかった。

5BC1128(スタディーバイブル新 207-208)「どのようにキリストの人性について語るか、よくよく気をつけなさい。彼を罪の傾向をもったひとのように人々のまえに教えてはならない。彼は第二のアダムである」

同上 1128, 9「罪のゆえに彼(アダム)の子孫は、生来の不従順の傾向をもって生まれてきた。しかし、イエス・キリストの内には一瞬たりとも悪の傾向がなかった。...彼の誕生は神の奇跡であった。...キリストに墮落のしみ、または傾向があったとか、腐敗があったとか、ある程度は墮落に屈したとかというような僅かの印象でも人々の心に残してはならない。彼は人が誘惑されるようにすべての点で誘惑されたが、しかし彼は『聖なるもの』と呼ばれた。それは人間に説明できないものとして残された神秘である。キリストの受肉はいつまでも奥義として残されるであろう。啓示されたことは我々と子孫のためであるが、しかし、我々人間と全く同じにしないようにすべての者に警告されている。そんなことはあり得ないからである...

人性が神性と混ざり合った正確な時を我々が知る必要はない。」

2 T 508「われわれ人間の墮落した性質からくる欲情をいなくことはなさらなかった。」

QD657「彼は罪の汚染なくしてお生まれになった」

大争闘下 397「救い主は、その思いにおいてさえ、誘惑の力に屈服されなかった。サタンは、人々の心の中に、なんらかの足場を見つける。心の中に罪の欲望があると、サタンはそれを用いて誘惑の力を表わす。しかし、キリストはご自身について、「この世の君が来る……。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない」と宣言された(ヨハネ 14:30)。サタンは、神の子の中に、彼に勝利を得させるなんのすきも見つけることができなかった。神のみ子は、天父の戒めを守られた。そして、サタンが自分に有利に活用することのできる罪が、彼の中にはなかった。」

5BC1131(スタディーバイブル新 210)「墮落した状態の人間の性質をとることによってキリストは少しも罪にあずかれなかった。彼は人類がとり囲まれている弱点や短所の影響の下にあった。...もし、サタンがほんのわずかな点でもキリストに罪を犯させたとしたら、彼は救い主の頭に傷をつけたであろう。しかし実際には、ただ彼のかかるとにさわることができただけであった。もしキリストの頭がさわられたとしたら、人類の希望は失われたであろう。神の怒りがアダムの上にくだったようにキリストの上にもくだったであろう。...われわれはキリストの人性には完全に罪がなかったことに関して少しの疑念も持ってはならない。」

彼は罪への傾向を持っておらず、人間は罪への傾向を持っていて、それでいて我々と同じようにすべての点で誘惑を受けられたことは神秘である。我々は内から誘惑されるので、我々と同じように誘惑されたことにはならないと議論してはならない。その領域は神秘であり、我々に隠されている禁断の知識である。

苛性ソーダ NaOH + 塩酸 HCl (同量ずつ) = 塩

苛性ソーダ単独では毒性があるが、塩酸を加えると毒性はなくなる。人性は原罪=罪性で毒性があるが聖霊が結合するとキリストの人性は、地の塩となった。

【ディスカッション】

人間は悪い品性の欠点、心の傾向を遺伝的に受け継ぐ。生まれながら罪性を持っている。イエスにはそれはなかった。ではイエスの誘惑は我々とは全然異なるもので「あらゆる点でわたしたちと同じように試みられた」とは思われない。イエスの誘惑は本物だったのか？

希上 35「イエスは遺伝という大法則の作用の結果をお受けになった。そのような結果がどのようなものであるかは、イエスのこの世の先祖たちの歴史に示されている。主は、われわれの苦悩と試みにあずかり、罪のない生活の模範を我々に示すために、このような遺伝をもっておいでになったのである。」

なぜ、キリストは人間の墮落した能力の弱さを遺伝的にあずかりながら、すべての人間が持つ心の悪への傾向（これも人間は相続する）は遺産として受け継がなかったのか？

その理由は彼は聖霊によって生まれたからである。

● キリストが我々の墮落した性質を取られた理由は何か？

キ実 294「サタンは、人間が神の戒めに従うことは不可能であると主張した。事実、自分の力ではわたしたちは戒めに従うことは不可能である。しかし、キリストは人間の形をとっておられて、人性に神性が結合するときは神の戒めのあらゆる点に従いうることを、その完全な従順によって立証なさった」

QD651「我々の墮落した性質をとられることによって、彼が用意された十分な備えを受けることによって、また神の性質にあずかることによって、我々の墮落した性質がどんなものになり得るかということを示された」

7BC926(スタディバイブル新 493)「彼がこのことをなさるのは、彼によって人がエデンでサタンにそそのかされ、誘惑によって失った最初(オリジナル)の心を回復するためであり、人の現在と永遠の幸福は、神のご要求に従うことであることを人が認識するためである。」

6BC1118(スタディバイブル新 428)「キリストを信じる信仰を通してすべての戒めに従う者だけが、罪を犯す前のアダムが生きた、罪のない状態に到達するであろう。」

7BC943(スタディバイブル新 530)「その時、我々はすべての罪、品性の欠陥から清められる。我々は罪深い傾向をひとつも持ちつづける必要はない。....

我々が神のご性質にあずかるにつれて遺伝的また後天的悪への傾向は品性から切り離され、我々は善のために生きた力となる。」

ヘブル 4:15「あらゆる点において誘惑されたが、罪は犯されなかった。」

● 誘惑について

人間は次のように誘惑される:

- (1) 世の魅惑が感覚に訴える一刺激する
- (2) 「罪の古き人=生来の性質」先天的、後天的罪への傾向が外部からの刺激に応答する(5

ヨハネ 6:57「生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きるであろう。」

ヨハネ 14:10「...父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである。」

ヘブル 5:7「キリストは、その肉の生活の時には、激しい叫びと涙とをもって、ご自分を死から救う力のあるかたに祈りと願いとをささげ、そして、その深い信仰のゆえに聞きいれられたのである。」

7BC 924(スタディーバイブル新 491)「キリストによって敵(サタン)を人間の性質において征服した。救い主の神としての力は隠された。彼は人の性質をもって、み力を神に求めて勝利なされた。」

3. キリストは我々の模範 1 ペテロ 2:21 (p 64のチャート参照)

天の律法、神の品性＝無我の精神＝己を空しくする精神を受肉から十字架の死に至るまで維持された。キリストはどのように我々が模範をまねるようにして下さるか？

ヘブル 6:20「その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデクに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなって、はいられたのである。」

主がさきがけとなって至聖所に入られたなら、我々もついていかなければならない。

黙示録 14:4「彼らは、女にふれたことのない者である。彼らは、純潔な者である。そして、小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者である。」

キリストは至聖所で一つになることを、すなわち永久的に結婚のちぎりを結ぶために待っておられるのである。結婚式は至聖所でなされるのであって、再臨の時ではない。

至聖所に入るとはどういう意味であろうか？

大争闘下 143,144「しかし、彼らは、主の働きをよく理解し、彼が神の前に出られるのに信仰によって従っていかねばならない。この意味において、彼らは、婚姻(英文)のへやに入ったと言われているのである。」

- ① 自我に死に、新生の経験をし、
- ② 三つの方法でそれを維持し、故意に罪を犯さない。日毎の経験で聖霊は次々と罪を現わしてくださる。→更に深い悔い改めへと導かれる。
- ③ 最後のあがないにおいて、完全にキリストのようになる。

罪への傾向、罪性、罪の記録(汚れた衣)が除去され、後の雨で聖霊が完全に充滿する時に、完全にキリストのようになる。「もう決して世の腐敗に汚されない、永遠に安全」国指下 196

● なぜ受肉について理解することがそれほど、重要なのであろうか。

これを真に理解し体験することがどのようにわれわれのためになるのであろうか。簡単に言うところである。いかにしてわれわれもまた、品性の完全に到達できるかを示している。悩みの時を通過する人々

は完全にイエスのみ姿を反映しなくてはならないと幾度となく告げられている。(初代文集 149 大争闘下 396-397) 残りの教会は神の戒めを守りイエスの信仰(「イエスを信じる信仰」は欽定訳では「イエスの信仰」となっている)を持つのである。(黙示録 14:12) 言い換えれば、イエスがお持ちになったもの、すなわち、罪の傾向のない完全な品性を、われわれが持つことが神の御目的である。われわれは完全な憎しみをもって罪を憎むところまで来なくてはならない。同時にイエスのごとく敵を愛し、迫害する者のために祈り、呪う者を祝福する完全に罪人を愛する愛を持つものとならねばならない。これは可能であろうか。イエスの生涯がその可能性を証明している。彼はご自分のために品性を完成する必要はなかった。なぜなら彼は罪なき神のみ子だったからである。ところがイエスはわれわれの代りに、この地上の最も墮落した時代の中に、品性を全うされたのである(ヘブル 2:10,5:7-9)。「キリストの中に神性と人性とが結合された」(クエスチョンズ・オン・ドクトリン p649 英文) 同様にわれわれの内に、われわれがクリスチャンの完全に到達するために神性が人性に結合されるのである。(希望上 135 参照)

1. 仲保者なくして神のみ前に立つ

6BC1118(スタディーバイブル新 428)「キリストに対する信仰によって神の戒めのすべてに従う者だけが、アダムが罪を犯す前に生きた罪のない状態に到達するであろう。彼らは、神の律法のすべてに従うことによってキリストに対する愛を証するのである」

7BC943「我々は一つの罪への傾向(原罪)も保つ必要はない。…我々が神の性質にあずかる時に、先天的、後天的悪への傾向は品性から切り除かれる」

大争闘下 140「天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血を注がれて罪から清まっていなければならない。…この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。」マラキ3:4、エペソ5:28、雅歌6:10

大争闘下 397「今、われわれの大祭司がわれわれのために贖いをしておられる間に、われわれは、キリストにあって完全になることを求めなければならない。救い主は、その思いにおいてさえ、誘惑の力に屈服されなかった。サタンは、人々の心の中に、なんらかの足場を見つける。心の中に罪の欲望があると、サタンはそれを用いて誘惑の力を表わす。しかし、キリストはご自身について、「この世の君が来る……。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない」と宣言された(ヨハネ 14:30)。サタンは、神の子の中に、彼に勝利を得させるなんのすきも見つけることができなかつた。神のみ子は、天父の戒めを守られた。そして、サタンが自分に有利に活用することのできる罪が、彼の中にはなかつた。これが、悩みの時を耐えぬく人々のうちになければならない状態なのである。」

4. キリストは我々に期待している、我々を必要とされている！

① 我々は神の栄光のために創造された。

コロサ 1:16「万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。これらいっさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。」

イザヤ 43:21「この民は、わが誉を述べさせるためにわたしが自分のために造ったものである。」

イザヤ 43:7「すべてわが名をもってとなえられる者をこさせよ。わたしは彼らをわが栄光のため

に創造し、これを造り、これを仕立てた。」

② 我々は神の名を汚した。

エゼキ 36:21 「しかしわたしはイスラエルの家が、その行くところの諸国民の中で汚したわが聖なる名を惜しんだ。」

③ 神はご自分の聖なる名を挽回なさる。

エゼキ 36:22 「それゆえ、あなたはイスラエルの家に言え。主なる神はこう言われる、イスラエルの家よ、わたしがすることはあなたがたのためではない。それはあなたがたが行った諸国民の中で汚した、わが聖なる名のためである。

わたしは諸国民の中で汚されたもの、すなわち、あなたがたが彼らの中で汚した、わが大いなる名の聖なることを示す。わたしがあなたがたによって、彼らの目の前に、わたしの聖なることを示す時、諸国民はわたしが主であることを悟ると、主なる神は言われる。」

- ① 神の名を負っているご自身の民によって聖なる神の名が汚されている。
- ② 主が聖なることを諸国民に示す。主の大いなる名の擁護をする。
- ③ それは、「あなたがたのためではない。」神ご自身のためである。
- ④ それをご自分の民によってなさる。

▲ 神は「ねたみの神」ということはどういう意味であろう？

出エジ 34:14 あなたは他の神を拜んではならない。主はその名を『ねたみ』と言って、ねたむ神だからである。(出エジ 34:14)

出エジ 20:5 それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、

申命記 4:24 あなたの神、主は焼きつくす火、ねたむ神である。

申命記 5:9 それを拜んではならない。またそれに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて三、四代に及ぼし、

申命記 6:15 あなたのうちにおられるあなたの神、主はねたむ神であるから、おそらく、あなたに向かって怒りを発し、地のおもてからあなたを滅ぼし去られるであろう。

ヨシュ 24:19 「あなたがたは主に仕えることはできないであろう。主は聖なる神であり、ねたむ神であって、あなたがたの罪、あなたがたのとがを、ゆるされないからである。

④ 全宇宙の前に神の聖なる名が挽回される。

エペソ 3:10 「それは今、天上にあるもろもろの支配や権威が、教会をとおして、神の多種多様な知恵を知るに至るためである。」

YI7/13/1893「教会は、キリストの恵みの富の倉庫である。主は教会を通して、ついにはもろもろの支配、権威に対しても、愛を最終的に、完全に表わすのである。」

9T21「ご自身の民を通して世の前にご自身の栄光を現わすのが神の目的である。」

人あし 61「しかし、贖罪の計画は、人類の救済より、もっと広く深い目的をもっていた。キリストが地上に来られたのは、人間を救うためだけではなく、この小さな世界の住民が、神

の律法に対して当然払わなければならない尊敬を払うようになるためではなかった。それは、宇宙の前で、神の性質(品性、英文)を擁護するためであった。救い主は、十字架におつきになる直前に、その大犠牲が、人間だけでなく、他の諸世界に住む者たちに与える影響を予見してこう言われた。「今はこの世がさばかれる時である。今こそこの世の君は追い出されるであろう。そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」(ヨハネ 12:31,32)。人間の救いのためにキリストが死なれた行為は、人間が天にはいる道を開いたばかりでなく、神とみ子が、サタンの反逆に対して取られた処置の正当性を全宇宙の前に示すのであった。それは、神の律法の永遠性を確立し、罪の性質とその結果を明らかにするのであった。」

⑤ ご自分の民を通してご自身の律法を擁護する。

サタンの主張:

1) 神の律法は不完全であるから、変更の必要あり (希下 287, 289) 被造物の幸福と自由のためにはならない。ゆえに神の律法は不要である。

2) 律法を守ることは不可能である。

自己犠牲と自己否定の愛の律法とは言うが、それは“利己主義の律法”にほかならない。(希上 9)

「自己否定は神にとって不可能である。故に人類家族にとって重要ではない。」(7BC974)

3) 義とあわれみは両立しない。

サタンが神の律法を攻撃するのは、創始者の權威をくつがえすのが目的であった。

すべてのものは「御子 (キリスト) によって造られ…御子のために造られた」(コロ 1:16) だからサタンはキリストに嫉妬し、憎み、殺そうとしたのである。

人あ上 14「神が天使達に律法を課するのは正しくないと言った。また被造物に従順と服従を求めて、神は、ただ自己を高めようとしておられるのだと言った。したがって天の住民と、すべて」世界に、神の統治は正しく、神の律法は完全であることを示す必要があった。」

大争闘下 235「そこで、すべての住民はもちろん、天の住民の前に、神の統治が正しく、神の律法が完全であることが実証されねばならなかった。」

神は、ルシファーから大変な挑戦を受けたのである。神はサタンの挑戦に答えることができなければ、全宇宙が危機にさらされるのである。

ST8-17, 1902「危機にさらされたのは、一つの世界だけではなかった。この地球が戦場であったが、戦いの結果によって、神の造られたすべての世界が影響されるのであった。」

神は、ご自分の名、政府、愛の律法を擁護する何らかの方法を必要とされた。神ご自身の正しいことを証明する必要があった。

RH4/16/1901「全天は、神の律法(品性)は聖にして正しく、良いものであることを擁護するのを聞くように待っている。この働きをする者はどこにいるだろうか？神は、ご自分の民が神のご計画と律法にさらに深い洞察を持つように召しておられる。」

5T746「もし、天からの絶えず増し加えられる光を必要としている民があるとすれば、それは神の民である。この危機の時に、神は彼らを、聖なる律法の保管者として、世に神の品性を

擁護するために召されたのである。」

⑥ **ご自分の民を通してご自身を啓示する。**

RH3/31/1909「今日、世界は、ご自分の聖徒たちを通してキリスト・イエスの啓示を緊急に必要としている」

実物 47「キリストは、ご自分の教会の中に、ご自身をあらわそうと熱望して待っておられる。キリストの品性が完全にキリストの民の中に再現されたときに、彼らをご自分のところに迎えるために、主はこられるのである。」

希望下 157「救い主は父の愛を表わすことによってキリストの栄光をあらわすのであった。そのようにみ霊も、キリストの恵みを世にあらわすことによってキリストの栄光を表わすのであった。神のみかたちが人間のうちに再現されるのである。神の栄え、キリストの栄光は、神の民の品性の完成に含まれている。」

⑦ **イエスは我々を必要としておられる！**

ST4/22/1903「我々が存在するようになったのは、神が我々を必要とされているからである。」

5. キリストのために

我々の内から罪を除去したいのは、イエスご自身のためなのだ！

イザヤ 43:25「わたしこそ、わたし自身のためにあなたのとがを消す者である。わたしは、あなたの罪を心にとめない。」

イエスは「ほふられたと見える」小羊として表わされている。

3希望 263「すべての者の上に神のみ子を十字架につけた罪がおかれている。」

教育 311-312「罪のために創造主が受けられた苦しみを思う人は非常に少ない。全天はキリストと苦しみを共にしたが、しかしその苦悩はキリストが人性をとって現われたときに始まったのでもなければ終わったのでもない。十字架は、罪が初めてあらわれたときから神の心に生じた苦痛を、われわれの鈍い感覚に示すものである。人が正しいことから離れるたびに、残酷な行ないをするたびに、人性が神の理想に到達できないたびに、神は悲しまれるのである。イスラエルが、神から離れた当然の結果として、敵に征服され、残虐と死という災難がふりかかったとき、『主の心はイスラエルの悩みを見るに忍びなくなった。』『彼らのすべての悩みのとき、主も悩まれて、いにしえの日、つねに彼らをもたげ、彼らを携えられた』と言われている。

神のみたまは『みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さる』。被造物全体が、共にうめき共に産みの苦しみを続けているとき、限らない天父のみ心は同情に痛むのである。」

私の罪が今もイエスを苦しめ十字架につけているという思いに聖霊は導かれる。

ゼカリヤ 12:10「わたしはダビデの家およびエルサレムの住民に、恵みと祈の霊とを注ぐ。彼らはその刺した者を見る時、ひとり子のために嘆くように彼のために嘆き、ういごのために悲しむように、彼のためにいたく悲しむ。」

その時、神は永久に、徹底的に我々の内から罪を除き去る。

ゼカリヤ 13:1「その日には、罪と汚れとを清める一つの泉が、ダビデの家とエルサレムの住民とのために開かれる。」

罪が永久に我々のうちから取り除かれた暁には、神の喜びはどんなであろうか？

イザヤ 62:5「若い者が処女をめとるようにあなたの子らはあなたをめとり、花婿が花嫁を喜びようにあなたの神はあなたを喜ばれる。」

ゼパニヤ 3:17「あなたの神、主はあなたのうちにいまし、勇士であって、勝利を与えられる。彼はあなたのために喜び楽しみ、その愛によってあなたを新にし、祭の日のようにあなたのために喜び呼ばわれる。」※「彼は歌をもってあなたのことを喜ばれる。欽定訳」

我々がクリスチャンになり始めた頃、外庭の経験ではただ罪のとがめ、罪悪感から解放されて、天国に行きたいというのが救いの動機であったかもしれない。我々の動機は完全に利己主義から開放されていなかった。しかし、聖化の経験が続くと、我々罪人のために払われた大いなる犠牲の認識が高まり、感動が深くなるであろう。罪深さの意識もますます深まる。やがて至聖所での経験において、我々の救いの動機は、自分が天国行きたいからではなく、イエスのために罪が除かれ、救われ、天国に行かなければならないという域にまで達するのである。

我々はキリストのために造られた!

キリストのために存在させられている!

キリストのために生かされている!

キリストのために罪なき完全にならなければならない!

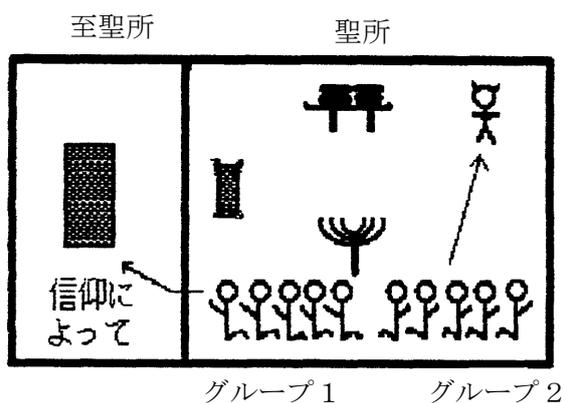
キリストのために天国に行かなければならない!

付録: キリスト教会の二つのグループ 初代文集 124-126

み座に向かって聖霊を求める二つの群れについて初代文集を読んでいただきたい。後半だけを引用する。どこに向かって聖霊降下を願い求めるかがどんなに重要な問題かが分かるであろう。真のリバイバルと偽りのリバイバルの分岐点になるのはここである。() の部分は初代文集にはなく、原文、E.White and Her Critics、624 に、又は DS, March 14, 1846 にある。

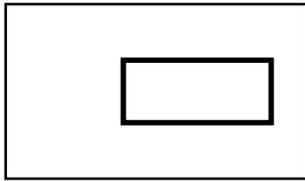
彼は、その車に乗って、父なる神が座っておられる至聖所にはいっていかれた。そこでわたしは、父なる神の前に立っておられる大祭司イエスを見た。彼の衣の縁には、鈴とざくろがあった。イエスとともに立った人々は、至聖所のイエスを信仰をもって仰いで、「わが父よ、あなたの霊を与えてください」と祈るのであった。すると、イエスは、彼らに聖霊を注がれた。その息吹のなかに、光と力、そして多くの愛と喜びと平和があった。

わたしは、御座の前でまだ頭をたれている人々を見ようと思ってふりかえった。彼らはイエスがそこを去られたことを知らなかった。サタンは御座のそばで、神の働きを行おうとするかのように見えた。わたしは、彼らが、御座を見上げて、「父よ、あなたの霊をお与え下さい」と祈るのを見た。するとサタンは、彼らに汚れた力を吹きこむのであった。それには、光と多くの力とがあった。しかし、あたたかな愛、喜び、平和はなかった。サタンの目的は、神の子供たちを欺いて、彼らを引きもどし、惑わすことであった。(わたしは至聖所におられるイエスに祈っていた組から一人一人立ち去って、み座の前の組に加わり、サタンの清くない感化を受けるのを見た。)

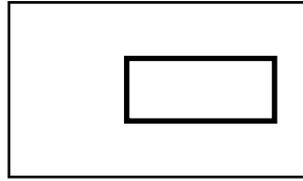


グループ 1	グループ 2
<p>備えのできていた者たちは婚姻に入った。マタイ 25:10. 彼らはキリストの至聖所での働きを理解した。</p>	<p>彼らは第三天使の使命に提示されている最後のあがないの真理を拒み、その結果キリストの仲保の祝福を受けない。大争闘下 148、婚姻を理解しない。</p>
<p>彼らは第三天使の使命は、信仰による義認そのものであることを理解する。</p>	<p>彼らは「天からの光を拒否し、神の恵みを失って自らの力に頼る」初代 390. そのつもりはないが、彼らは行いによる義に陥り、行いにいさおしがあるとする。小羊に従っていかないからである。</p>
<p>彼らは神を礼拝し、その祈りを至聖所に向かって捧げる。彼らはサタンの唯心的(心霊術)欺瞞から安全に守られる。</p>	<p>彼らは知らずにサタンを礼拝する。サタンは宗教的人格を装う。これは唯心論(心霊術)である。最後の時代の心霊術=唯心論については教育 269、大争闘下 308-310 を研究して頂きたい。</p>

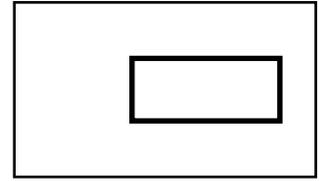
罪人から栄化へ



罪なきアダム



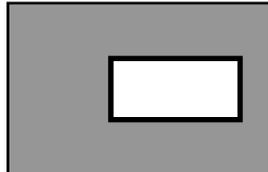
復活されたイエス



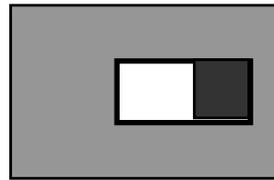
栄化された聖徒



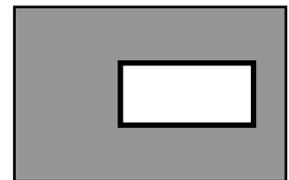
生来の人



地上のキリスト



悔い改めた人



印された人

